

# 北海道博物館第19回企画テーマ展・北海道化石会発足50周年記念展 「アンモナイトと生きる－50年の歩みとこれから－」の報告

圓谷昂史・久保見 幸・尾曲香織

Key Words アンモナイト (Ammonoidea)、白亜紀 (Cretaceous)、炭鉱と化石 (Coalmine and fossils)、道民参加型展示 (Collaboration exhibition with Hokkaido people)、モノと人 (Materials and person)

## 1 はじめに

北海道博物館（以下、当館）は、北海道開拓記念館と北海道立アイヌ民族文化研究センターという2つの道立施設が統合し、平成27（2015）年4月に開館した。当館は、北海道の自然・歴史・文化を紹介する北海道立の総合博物館であり、自然環境と人とのかかわりや、アイヌ民族の文化、本州から渡ってきた移住者の暮らしなどを調査・研究し、北海道民の貴重な宝である資料を収集・保存し、展示や教育、イベント・事業などを行っている。

当館の展示活動は、主に総合展示室、特別展示室で行う。特別展示室では、当館独自の研究成果を積極的に反映した特別展（有料）や企画テーマ展（無料）などの企画展示を、期限を限って開催している。企画テーマ展は、基本的には当館所蔵資料を中心とする企画展示で、年に数回開催するものである。当館が実施する研究プロジェクトなどでの研究成果や北海道の自然・歴史・文化に関わる特定のテーマを掘り下げたり、広く捉えたりする展示や、当館のコレクション紹介、新着資料紹介など、数多くの当館所蔵資料を紹介する展示である（北海道博物館 2022）。

令和4（2022）年2月から5月にかけて、『北海道博物館第19回企画テーマ展・北海道化石会発足50周年記念展「アンモナイトと生きる－50年の歩みとこれから－」』（以下、本展）を開催した。これまでの当館におけるアンモナイトを中心に展示する展示会は、主として地学担当の学芸員が展示会を担当し、地質学的見地（どの場所や時代から発見されるのかなど）、古生物学的見地（どのような生き物なのかなど）から構成されてきた。一方、本展では、化石関連の展示会では関わることの無かった民俗担当の学芸員が展示構成チームの一員となり、「アンモナイトに関わる人」をテーマに設定して、本展の主催である北海道化石会（以下、化石会）会員の自慢・思

い出のアンモナイト化石とそのエピソードを個人ごとに展示したり、会員が化石に興味をもったきっかけ、化石のクリーニングや保管方法の秘話を展示したりするなど、新しい試みで構成した。

本稿では、本展の詳細を記録する。まず「2 化石会と当館の主な活動」では化石会の活動の概要と当館との関わりについて紹介する。次に「3 本展の概要」では開催までの経緯と目的、全体スケジュールなどを紹介し、「4 展示」では具体的な展示内容とその準備過程を紹介する。そして「5 観覧者を対象としたアンケート調査」では調査結果を紹介し、最後に「6 おわりに」で全体の成果と課題を報告する。

## 2 化石会と当館の主な活動

化石会は、昭和45（1970）年に、北海道のほぼ中央部に位置する三笠市幾春別で発足した（表1）。主として北海道に居住する化石愛好家が、化石に対する正しい知識と理解を深め、交流をはかることなどを目的とする団体であり、令和3（2021）年度時点の会員数は30名であった。化石会発足の背景は、三笠市周辺では何種類ものアンモナイト化石がたくさん見つかり、明治末期から化石採集の愛好者が多くいたことにある。1950年代には、同市の桂沢ダムの建設工事により、化石の見つかる地層が水没することとなり、これを契機として、三笠高校の教員・学生らによる周辺一帯の化石採集が積極的に進められた。また、九州大学教員の松本達郎氏と、北海道のアンモナイト化石収集の先駆者である村本辰雄氏が複数の新種を発見するなど、化石に対する人々の関心は高まっていった。その間、村本氏や三笠高校の教員だった菊地正昇氏らが発起人となり、昭和30（1955）年に三笠化石研究同好会が発足した。この流れを汲み、化石を対象として採集・研究する団体が複数作られ、化石会もその1つとして発足した。化石会の活動は、道内

表1 北海道化石会と北海道博物館の主な活動

年度	活動内容	出品点数
昭和45年	1970 北海道化石会（以下、化石会）が、三笠市幾春別で発足。	-
46年	1971 北海道開拓記念館（以下、記念館）が、開館。	-
	記念館 第3回特別展「アンモナイト展」（本会発足記念展）にて展示。	* 詳細は不明
47年	1972 記念館 収蔵陳列室*1で常設展示（平成25（2013）年の記念館の閉館まで、毎年化石を交換）。	-
58年	1983 記念館 第44回テーマ展「クビナガ竜のいた北海道」にて展示。	* 詳細は不明
平成12年	2000 記念館 第49回特別展「恐竜とアンモナイトの世界」にて展示（化石会創立30周年記念事業）。	27名 96点
17年	2005 化石会が、北海道博物館協会より表彰。	-
19年	2007 記念館 第148回テーマ展「まるごとアンモナイト」にて展示。	21名 409点
24年	2012 記念館 第69回特別展「アンモナイト」にて展示（化石会創立40周年記念事業）。	15名 361点
27年	2015 北海道博物館（以下、当館）が、開館。	-
	当館 休憩ラウンジの「道民参加型展示*2」にて展示（～現在。毎年化石を交換）。	-
	当館 第3回企画テーマ展「北海道のアンモナイトとその魅力」にて展示。	11名 102点

\*1「収蔵陳列室」：昭和47（1972）年に、記念館の常設展示を補足することを主な目的として、特定の専門分野や研究領域ごとに整理した資料を分類展示するため設置された部屋

\*2「道民参加型展示」：当館の道民参加の推進の一環として、中二階にある休憩ラウンジで行われる展示

に所在する博物館をはじめとする諸施設においても活発に行われており、その功績が讃えられ、平成17（2005）年には、北海道博物館協会から表彰を受けている（表1）。

当館の前身の1つである北海道開拓記念館（以下、記念館）は、北海道百年記念事業の一環として、「北海道の生い立ち、開拓の足跡を示す資料を収集、保存し、展示して北海道の歴史と未来への課題や可能性の認識に役立てると共に、今後、道内におけるこの種の施設のセンターとしての役割を果たし、北海道の開発に寄与せしめる」（「北海道開拓記念館構想」（昭和42（1967）年））ことを目的に、昭和46（1971）年に総合的な歴史博物館として開館した（表1）。同年に開催された第3回特別展「アンモナイト展」において、化石会から化石が出品され、展示活動の連携・協働が始まった。その後、折々の展示会でも多数の貴重な化石資料が出品された。また、昭和47（1972）年には、常設展示を補足することを主な目的として、特定の専門分野や研究領域ごとに整理した資料を分類展示するために設置された収蔵陳列室にも、化石が出品された。収蔵陳列室における展示は、化石資料を毎年入れ替える形式であり、記念館が閉館した平成25（2013）年まで継続された。平成27（2015）年の当館開館以降は、来館者がくつろぐことのできる休憩ラウンジ\*を会場に、当館が推進する道民参加型展示の1つとして、化石の展示を継続している（\*令和5（2023）年3月現在は、新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ感染症）対策のため閉室中）。

このように化石会と当館は、「アンモナイトをはじめとする化石の魅力をたくさんの方々に伝えたい」という志を持ち、半世紀以上もの間、協力し合いながら、展示活動を中心に事業を展開してきた。

### 3 本展の概要

#### (1) 開催までの経緯と目的

当館におけるアンモナイトを中心に展示する企画展示は、平成27（2015）年に第3回企画テーマ展「北海道のアンモナイトとその魅力」（以下、企画テーマ展）として開催した（北海道博物館 2022）。この企画テーマ展では、筆者の1人である圓谷（地学担当）が、展示構成チーム（展示構成を担当する職員で作るチーム）のチーフを担当した。他館における展示会をはじめ、アンモナイトを中心に展示する展示会は、主として地質学的見地、古生物学的見地から構成されることが多い。この企画テーマ展でも、これらの見地を基本としながら「アンモナイトの魅力」をテーマに設定し、さまざまな種類（形）があること、化石そのものが美しいこと、自分も新種を発見できるかもしれないワクワクなど、多様な“魅力”を紹介できるよう展示を構成した。

一方、本展では「アンモナイトに関わる人」をテーマに設定した。これまでのアンモナイトを展示する展示会で取り上げられる“人”は、アンモナイト研究者をはじめ、歴史的な偉人であることが少なくない。しかし、ここで指す“人”とは、いわゆる研究者や偉人ではなく、化石を愛好する化石会の会員個人を中心とした。このテーマを設定した理由として、化石会の会員と展示の準備を進める中で、化石を好きになったきっかけや、化石会加入により起こった変化など、会員それぞれに化石や化石会にまつわるストーリーを持っていることに気づかされたことが挙げられる。また、博物館で展示されるような化石の多くは、研究者や学芸員ではなく、化石会会員のよう熱心な愛好家の手によって収集されており、これらの化石が博物館に寄贈されることで、展示や普及事業を一層豊かにすると共に、化石研究の発展にも大きく貢献しているという、化石を見るだけではわかりにくい舞台裏

を紹介したいと考えたことにあった。そして、本展は入場料が無料の展示会であり、多くの方々に気軽に観覧いただくことができるからこそ、アンモナイトになじみの無かった観覧者にも楽しんでもらいたいという意図もあった。

以上のことから、本展では、化石会の会員個人を中心とした「アンモナイトに関わる人」を紹介することで、化石と化石会、当館の活動をより身近に感じてもらえるようにすることを目的とした。

## (2) 会期

当館が、令和元（2019）年度までに開催した企画テーマ展の会期は、最長で57日間であった（北海道博物館2022）。令和2（2020）年度以降、コロナ感染症の感染拡大に伴う行動制限や臨時休館などの措置により、展示会そのものが中止になったり、会期が短くなったりする状況にあった。そのため本展は、これらの措置が講じられたとしても、できる限り多くの方々に観覧いただけるよう、令和4（2022）年2月19日（土）～5月22日（日）の80日間（休館日を除く）と、会期を拡大することとした。幸いなことに、会期中にこれらの措置が講じられることはなく、予定どおり開催することができた。

## (3) 全体スケジュール

当館が開催する企画展示は、中期的な展示会計画を策定し、数年前から準備を進めている。本展の計画が立案されたのは、令和元（2019）年度である（表2）。本来であればこの時点で、展示の立案者をチーフとする展示構成チームを立ち上げて、展示会の開催方針を定め、展示資料の調査や調整などを進めることになる。しかし、コロナ感染症による種々の措置が講じられたことにより、本展の開催方針が固まったのは令和3（2021）年6月と、開催まで8か月に迫っていた。その後も、行動制限の措置が継続したことにより、展示資料の調査や化石会会員への聞き取りなどの準備にかけられる期間はさらに限定されることとなった。

令和3（2021）年6月以降、感染防止対策を講じながら、当館と化石会の担当者による展示会会議を7月、8月、11月に開催し、化石会会員へのアンケート調査や聞き取り調査を9月、10月、11月に行い（写真1）、野外調査を10月に実施した（写真2）。また、当館が収蔵する化石会あるいは化石会会員から寄贈されたアンモナイト化石を展示するため、三笠市立博物館の協力を得て、現在の研究知見に沿って資料の学名や産出時代を体系的に見直す再整理作業を実施した（このことは、本紀要の久保見ほか（2023）を参照いただきたい）。さらに、チラシやポスター、ウェブサイトなど、広報活動で使用するた

めの写真撮影やデータ作成を8月、12月に行った。展示を印象付けるメイン写真は、本展のテーマである「アンモナイトに関わる人」を多くの方に身近に感じてもらえるよう、力強くも温かみのあるデザインを目指した。今回は、長年活動を行ってきた、化石会の藤原会長に、アンモナイト化石を手にもっていただき、クローズアップした写真を使用することとした（写真3）。

令和4（2022）年1月以降は、化石会の展示資料を搬入し、展示設営などの作業を開始し、これらの様子を当館のTwitterで公表した（写真4）。開催前日には、マスコミ向け内覧会を開催し、報道機関4社から取材を受けた（写真5）。本展の開催期間が比較的長期間であることから、通常、会期前に近隣施設などに配布するチラシやポスターの広報物は、会期中の3月に発送することとした。4月から5月には、化石会とも連携して関連講座を複数回実施した（写真6）。さらに、長年にわたる化石会の貢献に感謝の意を表すため「感謝状の贈呈式」を開催した（写真7）。

以上の展示準備、広報や教育普及活動は、展示構成チームをはじめ、当館職員で構成する「展示プロジェクトチーム」が中心となり運営した（北海道博物館2022）。

## (4) 展示シナリオ

本展の展示シナリオは、展示構成チームの圓谷、久保見、尾曲の3名の学芸員で原案を作成し、化石会と逐次議論しながら検討を進めた。その結果、以下の3章とすることとなった。

第1章は、「北海道とアンモナイト」と題し、北海道からアンモナイト化石が数多く産出する秘密や、人と地質が関わってきた歴史、アンモナイトがいた頃から現在までの北海道の成り立ちなど、主に地質学的知見から紹介した。担当は、久保見（自然研究グループ 地学担当）が務めた。

第2章は、「私の自慢・思い出のアンモナイトたち」と題し、化石会会員14名が出品するアンモナイト化石など、152点を個人ごとに展示ケースを分けて、化石にまつわる自慢・思い出のエピソードと共に展示した。担当は、圓谷（自然研究グループ 地学担当）が務めた。

第3章は、「アンモナイトに関わる人たち」と題し、普段は家や地域のしきたりなどを研究している民俗担当の学芸員が、アンケートや聞き取り調査から、これまで見えてこなかった各会員が化石に興味をもったきっかけや化石を探すコツ、保管方法などを紹介した。担当は、尾曲（生活文化研究グループ 民俗担当）が務めた。

表2 全体スケジュール

年月	内容
令和元(2019)年	北海道化石会（以下、化石会）から、令和3（2021）年度の展示会開催の打診を受け、北海道博物館（以下、当館）展示ワーキングチーム会議*1などで議論し、2021年度の開催を目指すこととなった。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、当館でも臨時休館等の措置が講じられたことで、展示会の開催はもちろん、その見通しを立てることも困難となった。一方、当館と化石会の担当者は、展示会の開催を目指して協議を重ねた。
令和3(2021)年6月	「北海道博物館第19回企画テーマ展・北海道化石会発足50周年記念展」として、令和4（2022）年2月19日（土）～5月22日（日）の会期で開催する方針が固まる。また、当館が収蔵する地学資料の内、化石会あるいは化石会会員から寄贈された資料を展示するため、整理作業（6月～9月）を開始。
2021年7月	当館と化石会の担当者による「第1回 展示会会議」を開催。展示会の基本的方針を協議。
2021年8月	「第2回 展示会会議」を開催。具体的な展示内容やスケジュールを協議。また、広報で活用するため、化石会が所有するアンモナイト化石などを撮影。
2021年9月	化石会会員へのアンケート調査を実施。
2021年10月	化石会会員への聞き取り調査と、化石会のアンモナイト採集に同行し、野外調査を実施。
2021年11月	化石会会員への聞き取り調査を実施。また、「第3回 展示会会議」を開催。本展の実施に関する「協定書」を締結。
2021年12月	当館が収蔵する化石会あるいは化石会会員から寄贈された資料の「第1回再整理作業」を三笠市立博物館の協力により実施。また、ポスターやチラシなど、広報物の作成を開始。
令和4(2022)年1月	化石会会員の展示資料を搬入し、展示設営などの各作業を開始。
2022年2月	当館の公式Twitterで広報を開始。
2022年2月18日	マスコミ向け内覧会を開催（報道機関4社による取材）。
2022年2月19日	展示会開会。
2022年3月	「第2回再整理作業」を三笠市立博物館の協力により実施。ポスターやチラシなどを近隣施設に発送。
2022年4月	当館所蔵資料の展示入れ替えを実施。また、関連事業のミュージアムカレッジ「学芸員が語る！第19回企画テーマ展の見どころ」を開催。
2022年5月	化石会への「感謝状贈呈式」を実施（報道機関2社による取材）。また、関連事業の特別イベント「石の中からホンモノの化石を掘りだしてみよう！」、ちゃれんがワークショップ「アンモナイト折り紙で学ぶ生物の「かたち」の不思議」を開催。
2022年5月22日	展示会閉会。展示撤収などの各作業を開始（～6月上旬）。

\*1 展示ワーキングチーム会議

当館では、総合展示、及び企画展示などの事業を円滑に進めるため、館内の内部組織として学芸部長を座長とする展示ワーキングチームを設置している。主な任務は、総合展示、及び企画展示の運営方針・内容についての検討、外部からの提案による展示企画などについての検討などである（北海道博物館 2022）。

## (5) 展示構成

(4) 展示シナリオを基に、各章の詳細を定め、会場のレイアウトを作成した（図1）。会場となる特別展示室は、観覧者の出入口が1つであり、この出入口のある“広い部屋（右側）”と“狭い部屋（左側）”の2つに分かれている。本展では、広い部屋（右側）を展示空間とし、狭い部屋（左側）は展示機器材や資料の梱包資材などを保管するバックヤードとした。また、コロナ感染症対策のため、資料や展示ケース、解説パネルなどの配置はできる限り間隔をとるように工夫し、展示設営にかかる各作業でも、作業する職員の3密や接触が極力発生しないよう配慮した。

なお、図版と展示資料リストは、参考資料として本稿末に掲載する（本稿の図版では、化石会会員が出品した化石を掲載し、当館所蔵の資料は本紀要の久保見ほか（2023）で掲載する）。



写真1 聞き取り調査



写真2 野外調査



写真3 チラシの表面



写真4 当館Twitter



写真6 特別イベント「石の中からホンモノの化石を掘りだしてみよう！」

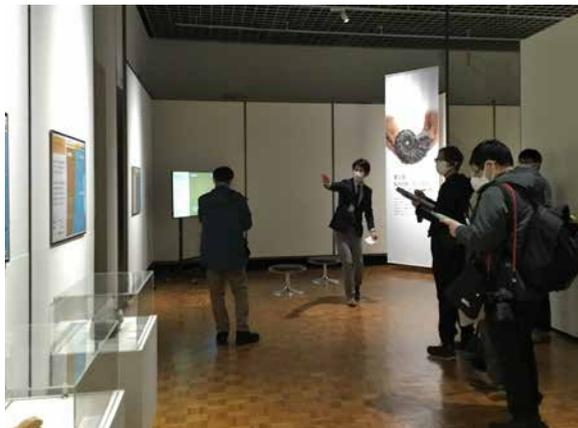


写真5 マスコミ向け内覧会



写真7 感謝状贈呈式

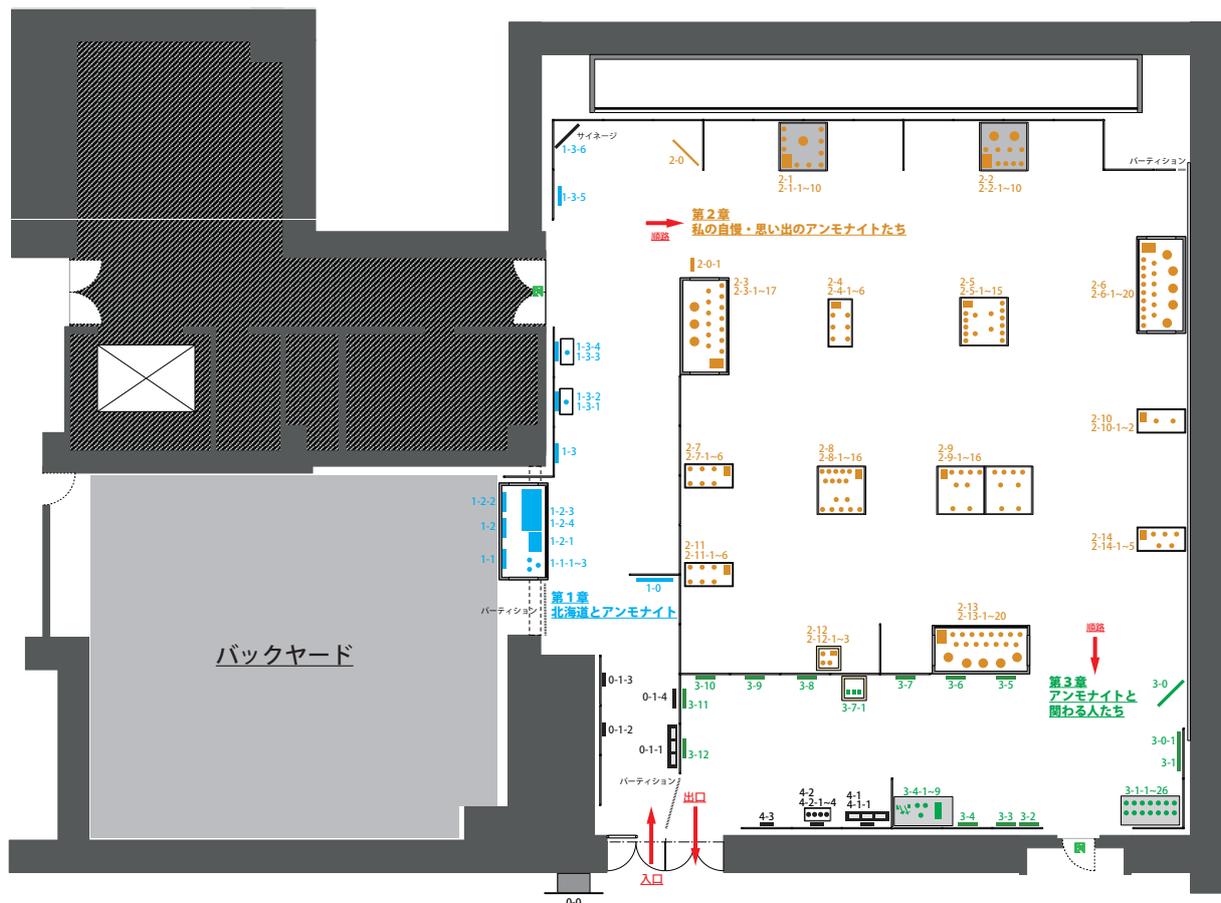


図1 会場平面図

## 4 展示

### (1) タイトル・導入

当館と化石会による開催の挨拶のパネル、展示を観覧するために必要となるアンモナイトの基本情報をまとめたパネル（生物としての特徴や殻の部位の名称など、古生物学的見地の内容）を展示した（写真2）。また、本展全体の概要を記した、解説パンフレット（無料）を配布した（写真8）。

### (2) 第1章 北海道とアンモナイト

#### (2)-1 展示内容

北海道中央部や東部に分布する「蝦夷層群」や「根室層群」と呼ばれる白亜紀～古第三紀の海で堆積した地層の内、白亜紀の地層からは数多くのアンモナイト化石が見つかっており、今日に至るまで研究者や化石愛好家により調査・研究が進められてきた。その調査・研究は、150年ほど前に、開拓使が北海道の地質調査のために雇い入れたアメリカ人の鉱山学者であるベンジャミン・スミス・ライマン（以下、ライマン）らが実施した炭田調査から始まった。本章では、これらの背景を踏まえ、ライマンらが作成した地質図を中心に、北海道からアン

モナイト化石が数多く産出する秘密、人と地質が関わってきた歴史、アンモナイトが生きていたころから現在までの北海道の成り立ちを示す古地理図のパネル、および関連する実物資料を用いて、主に地質学的見地で展示した（写真9）。以下、本章の展示内容を紹介する。

#### (2)-1-1 北海道は日本一のアンモナイト産地！

「なぜ北海道から数多くのアンモナイト化石が産出するのか？」に焦点を当て、アンモナイト化石が産出する蝦夷層群や根室層群の分布地域と地層が重なる順序（層序）の概要のパネルを展示した（写真10、図3）。また、アンモナイトは、殻の巻き方の違いによって2つのグループに分けることができ、平面に巻いた形の殻をもつ“正常巻き”と、巻きがほどけてバネやクリップのような形の殻をもつ“異常巻き”があることを示すため、3点の実物化石を展示した（写真11）。

#### (2)-1-2 北海道の地質学とアンモナイト研究の発展

「北海道の地質学とアンモナイト研究のはじまりと発展」に焦点を当て、ライマンらが実施した鉱産資源の実態調査と炭田開発の概要のパネルを展示した（写真10、図4・5）。パネルでは、ライマンが助手たちと協力して



写真8 タイトル・導入の展示



写真9 「第1章 北海道とアンモナイト」の展示



写真10 「北海道は日本一のアンモナイト産地！」と「北海道の地質学とアンモナイト研究の発展」の展示



写真11 アンモナイト化石の展示（当館収蔵）

## ～アンモナイトとは～

**1. 絶滅した生き物！**

アンモナイトは、約4億年前～6,600万年前の海にすんでいた殻を持つ生き物です。ティラノサウルスやカムイサウルスなどの恐竜（非鳥類型恐竜）と同じように、地球上から完全になくなってしまいました。しかし、地中に埋もれて、殻などのかたい部分が化石となったことで、私たちはその存在を知ることができます。これらの化石は、はるか昔の海の様子を教えてくれる大切な宝物といえます。

**2. 実は、イカやタコの仲間！**

アンモナイトと言えば、くるくると平面に巻いた形の殻をイメージすることが多いため、巻貝の仲間と思われがちです。しかし、殻やエサを食べるときに使う歯などの、化石の特徴を詳しく調べたところ、イカやタコの仲間（頭足類）であることがわかっています。

**3. いろいろな形がある！**

アンモナイトは、殻の巻き方の違いによって、2つのグループに分けることができます。くるくると平面に巻いた形の殻をもつものは「正常巻き」。巻きがほどけているもの、パネやクリップのような形の殻をもつものは「異常巻き」と呼ばれます。「異常」といわれますが一定の規則に従って巻いており、奇形や病気によるものではないと考えられています。また、殻が厚いものや薄いものがあったり、殻の表面に肋や竜骨などの裝飾があったりと、いろいろな形があります。

図2 「アンモナイトとは」の解説パネル

## 北海道は日本一のアンモナイト産地！

北海道からは約500種類以上のアンモナイト化石が産出しており、世界有数の産地としても有名です。なぜ、これほどのアンモナイト化石が産出するのでしょうか？ それは、地層に秘密が隠されています。北海道には、白亜紀～古第三紀の海で泥や砂が堆積した地層が連続的に分布し、「蝦夷層群」や「根室層群」と呼ばれています。これらの地層から数多くのアンモナイト化石が産出するとともに、「ノジュール」と呼ばれる岩石の中に包み込まれることで、良好な保存状態で発見されるのです。

**アンモナイトが産出する場所**

**白亜紀～古第三紀の年代層序**

紀	期	地層	アンモナイトが産出する地域
古第三紀	ダニアン	根室層群	根室
	約6,600万年前		
	マーストリヒチアン		
	約7,210万年前		
	カンパニアン		
	約8,360万年前		
	サントニアン		
	約8,630万年前		
	ユニアシアン		
	約8,980万年前		
白亜紀	チュウロニアン	蝦夷層群	中川地域、浦幌地域、三立・夕張地域、穂別地域
	約9,390万年前		
	セマニアン		
	約1億50万年前		
	アルビアン		
	約1億1,300万年前		
	アプチアン		
	約1億2,100万年前		
	ベリアシアン		
	約1億4,500万年前		

図3 「北海道は日本一のアンモナイト産地！」の解説パネル

調査した様子を伝えるため、北海道大学附属図書館が所蔵する「ライマン氏と助手たち（東京麹町区平河町のライマン邸にて）」（請求番号:S(b)142）の写真を借用した。また、ライマンらの調査成果である「日本蝦夷地質要略之図（A Geological Sketch Map of the Island of Yesso, Japan）」の実物資料を展示した（写真12）。歴史研究グループの三浦泰之学芸主幹の指示を受けて、インクの退色を防ぐため、適切な照度の下で展示した。さらに、現在の北海道の地質を知ってもらうため、産業技術総合研究所地質調査総合センターが公開する20万分の1シームレス地質図を参考に、本章の担当者が作成した「現在の北海道の地質図」のパネルも展示した（図6）。ライマンたちが作成した当時の地質図と現在の地質図を見比べてもらうことで、アンモナイト化石を含む地層や石炭層がどこに分布するのかを確認してもらうのと同時に、当時の地質図の精密さや正確さを感じてもらうことを目指した。

### (2)-1-3) いざ、アンモナイトの世界へ！

「北海道の成り立ち」に焦点を当て、現在からアンモナイトが生きていたころまでの間に、地史的に重要な出来事があった、①現在～第四紀（約2万年前）、②新第三紀中新世（約2,000万～1,300万年前）、③古第三紀始新世（約5,000万～4,500万年前）、④後期白亜紀カンパニアン～マーストリヒチアン（約8,000万～6,600万年前）の4つの時代の、古地理図を作成し、その概要と大地の変動の原動力であるプレート運動を解説するパネルを展示した（図7～10）。古地理図の展示は、古い時代（後期白亜紀）→新しい時代（現在）の順に展示することが多いが、本展示では新しい試みとして、観覧者にアンモナイトがいた世界へとタイムスリップしながら、北海道がどのように成り立ったのかを理解してもらうことを目指し、あえて新しい時代（現在）→古い時代（後期白亜紀）の順番で展示した。また、北海道の成り立ちを考えるうえで非常に重要な岩石として、日高山脈の構成要素である新第三紀中新世の「かんらん岩」、北海道の産業を支えた古第三紀始新世の「石炭」の実物資料をそれぞれの時代のパネルと共に展示した。最後に、これらの古地理の変遷を一連の流れで再確認できるよう、データをデジタルサイネージに格納して展示した（写真13）。

### (2)-2 展示準備

本章は、ライマンらが作成した地質図を中心に、北海道の地質や古地理の変遷など、主に地質学的見地から展示を構成した。展示の準備では、多数の文献資料の調査を行い、各パネルを作成した。内容の性格上、地質学に関する専門用語を多用せざるを得ず、観覧者にやや難しい印象を与えてしまうことを考慮して、できる限り平易

な言葉で、かつ文章量も抑えるよう心掛けた。文章や図などは、パネルにする前に、展示構成チーム以外の当館学芸職員にも読んでもらい、適宜修正した。以下に、パネル作成に用いた文献資料や補足的な内容を記述する。

### (2)-2-1) 北海道は日本一のアンモナイト産地！

北海道のアンモナイト化石が産出する蝦夷層群と根室層群の分布地域や層序、産出するアンモナイト化石の特徴について文献資料の調査を行った。

極東ロシア・サハリン西部～北海道にかけて、前期白亜紀アプチアン（約1億2,100万年前）～古第三紀暁新世の蝦夷層群が分布する（Takashima et al. 2004）。蝦夷層群は、礫岩、砂岩、泥岩、および凝灰岩を主とする海成あるいは河川成の地層であり、東アジア大陸縁辺で堆積したと解釈される（君波 1989；Takashima et al. 2004など）。また、北海道東部の白糠丘陵や釧路～厚岸～根室周辺には、後期白亜紀マーストリヒチアン（約6,600万年前）～古第三紀暁新世および始新世の根室層群が分布する（Kiminami 1983）。根室層群は、泥岩や砂岩などを主とする海成の地層で、オホーツク海プレー

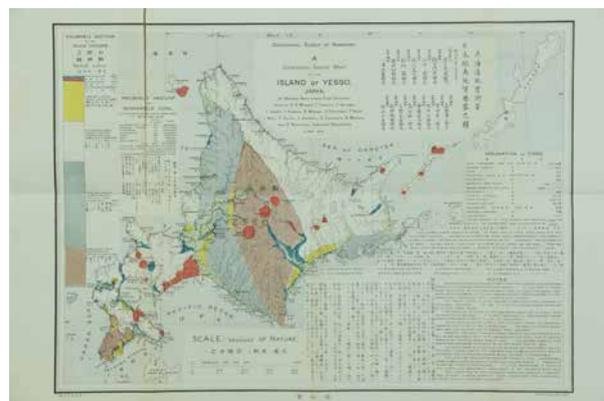


写真12 「日本蝦夷地質要略之図（A Geological Sketch Map of the Island of Yesso, Japan）」（当館収蔵）



写真13 デジタルサイネージの展示



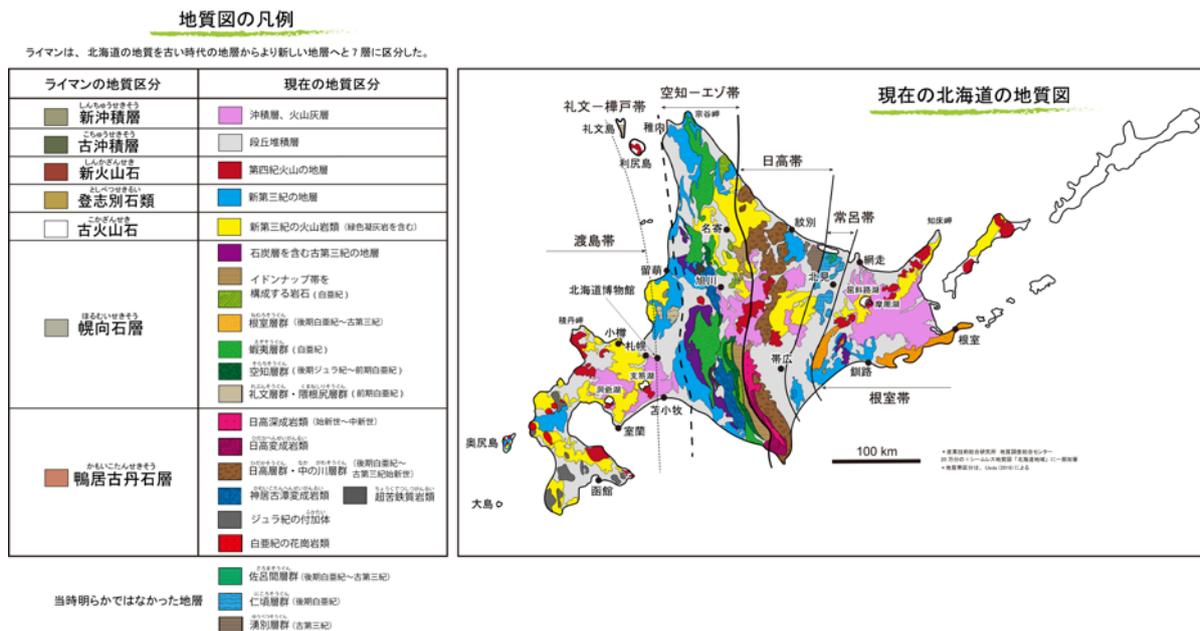


図6 「現在の地質区分図と凡例」のパネル

に、石炭の分布域や埋蔵量を把握するというライマンらの業績は、北海道の産業を発展させただけでなく、その後の化石研究者や化石愛好家の活動の礎となり、現在の精密かつ正確な地質図の作成へとつながる。

(2)-2-3) 北海道の古地理の変遷

北海道の古地理の変遷について文献資料の調査を行った。

北海道の成り立ちを考える上で地史学的に重要な出来事があった、①現在～第四紀 (約2万年前)、②新第三紀中新世 (約2,000万～1,300万年前)、③古第三紀始新世 (約5,000万～4,500万年前)、④後期白亜紀カンパニアン～マーストリヒチアン (約8,000万～6,600万年前) の4つの時代に分けることとした。

①現在～第四紀 (約2万年前)

現在の地球表層には、「プレート」と呼ばれる岩盤の板で覆われている。北海道周辺には、北米プレート、ユーラシアプレート、および太平洋プレートが存在する。太平洋プレートが北米プレートの下に沈み込むことで、「千島海溝」が形成されている。第四紀 (約2万年前) の北海道は寒冷な環境であり、周辺の海が氷で覆われていた。この頃、マンモスゾウやバイソンが大陸から北海道へと渡ってきた。本時代の古地理図は、野田・後藤 (2004)などを参考に作成した。

②新第三紀中新世 (約2,000万～1,300万年前)

約2,000万年前、オホーツクプレートに割れ目が形成され、日高主衝上断層などに沿った右横ずれ運動によって、北海道の東側部分が南方向へと移動した。その後、東側部分が、現在とほぼ同じ位置にあった西側部分にぶ

つかった。約1,300万年前、北海道の西側部分にぶつかった東側部分がめくれあがることで、日高山脈ができあがった。その時、地下深部で形成された深成岩類の一つである「かんらん岩」が地表に顔を出した。本時代の古地理図は、Kimura et al. (1996)、Usuki et al. (2006)、およびTakahashi et al. (2021)などを参考に作成した。

③古第三紀始新世 (約5,000万～4,500万年前)

約5,000万年前、西へと動いてきた北海道の東側半分は、ユーラシアプレートと激しくぶつかり始めた。約4,500万年前の北海道の西側部分は、森林で覆われており、河川が流れる広大な陸地であった。この頃の東アジア大陸沿岸では、「石狩層群」と呼ばれる、砂や泥からなる河川成あるいは浅海成の地層が堆積し、その中で植物がやがて湖や沼にたまり、三笠や夕張などで見られる「石炭」へと変化した。本時代の古地理図は、君波 (1989) およびTakahashi et al. (2021)などを参考に作成した。

④後期白亜紀カンパニアン～マーストリヒチアン (約8,000万～6,600万年前)

約8,000万～6,600万年前、北海道の西側部分は、今の中国やロシアなどがある東アジア大陸の一部であった。北海道の東側部分は、遠く離れた場所で火山活動を伴う島々 (古千島弧) であった。広大な大陸縁辺では、恐竜が歩き回り、海ではアンモナイトが悠々と泳いでいた。この頃、東アジア大陸の沿岸では「蝦夷層群」、古千島弧では「根室層群」と呼ばれる、砂や泥からなる海の地層が堆積し、恐竜やアンモナイトの化石が保存された。本時代の古地理図は、君波 (1989)などを参考に作成した。



## いざ、アンモナイトの世界へ！



先ほどの地質図を読み解くと、私たちが住んでいる北海道は、様々な種類や性質を持った岩石や地層から構成されていることが分かります。これらの岩石や地層は、プレートの運動とともに作られたり、移動したりを繰り返すことで、現在の北海道を作り上げました。ここでは、プレートの動きや北海道の形に注目しながら、現在からアンモナイトが生きていた白亜紀の世界まで、時代をさかのぼってみましょう！

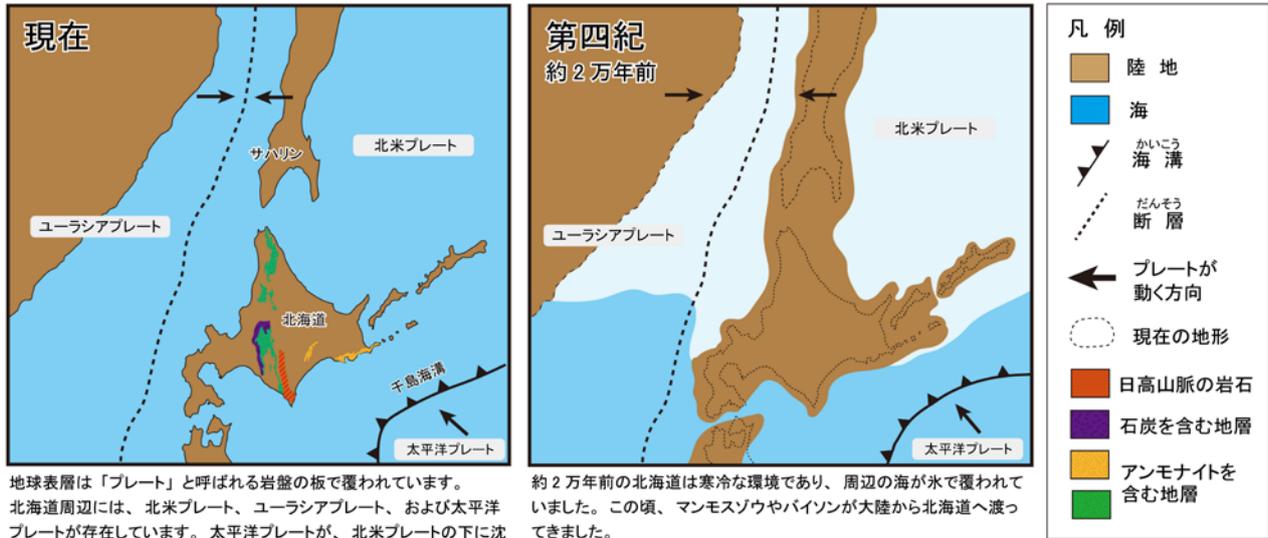


図7 「いざ、アンモナイトの世界へ！(現在～第四紀の古地理)」の解説パネル

### 新第三紀 中新世 前期～中期 約2,000万～1,300万年前

約2,000万年前、オホーツクプレートに割れ目が形成され、北海道の東側部分が南方向へと移動します。その後、東側部分が、現在とほぼ同じ位置にあった西側部分にぶつかりました。

約1,300万年前、ぶつかった東側部分がめくれあがることで、日高山脈ができあがりました。そのときに、地下深部の岩石である「かんらん岩」が地表に顔を出しました。

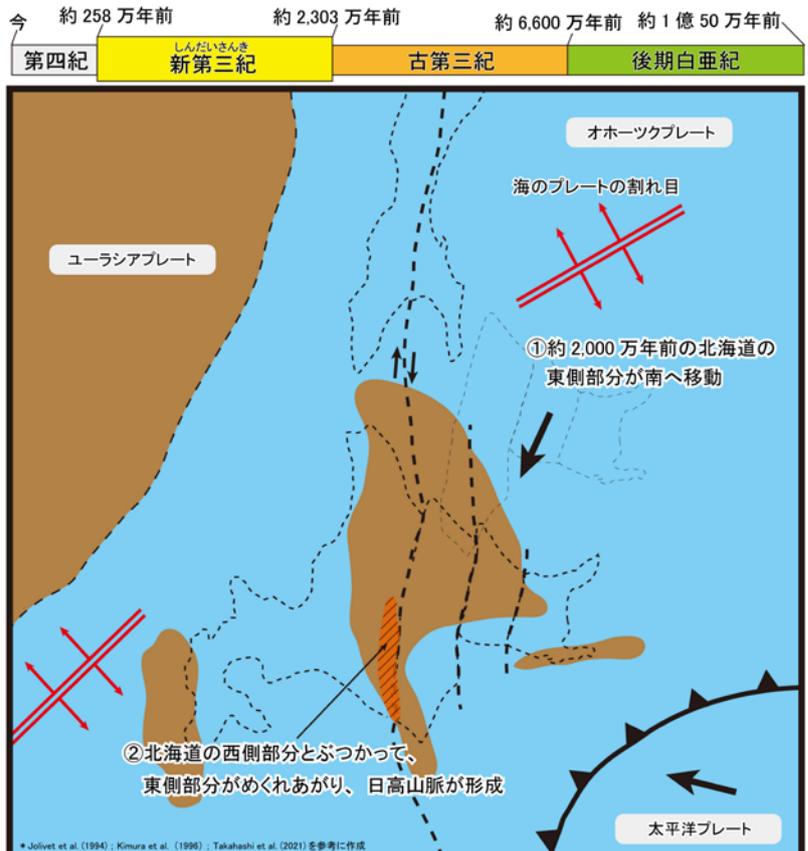
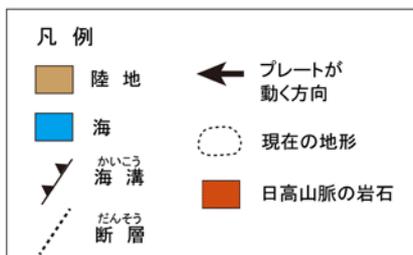


図8 「新第三紀の古地理」の解説パネル

こだいさんき しんせい  
**古第三紀 始新世**  
 約 5,000 万～ 4,500 万年前

約 5,000 万年前、西へと動いてきた北海道の東側部分は、大陸へと激しくぶつかり始めます。

約 4,500 万年前、北海道の西側部分は、広大な森林でおおわれた陸地でした。これらの植物が、やがて湖や沼にたまり、長い年月をかけて、三笠や夕張などで見られる「石炭」へと変化しました。

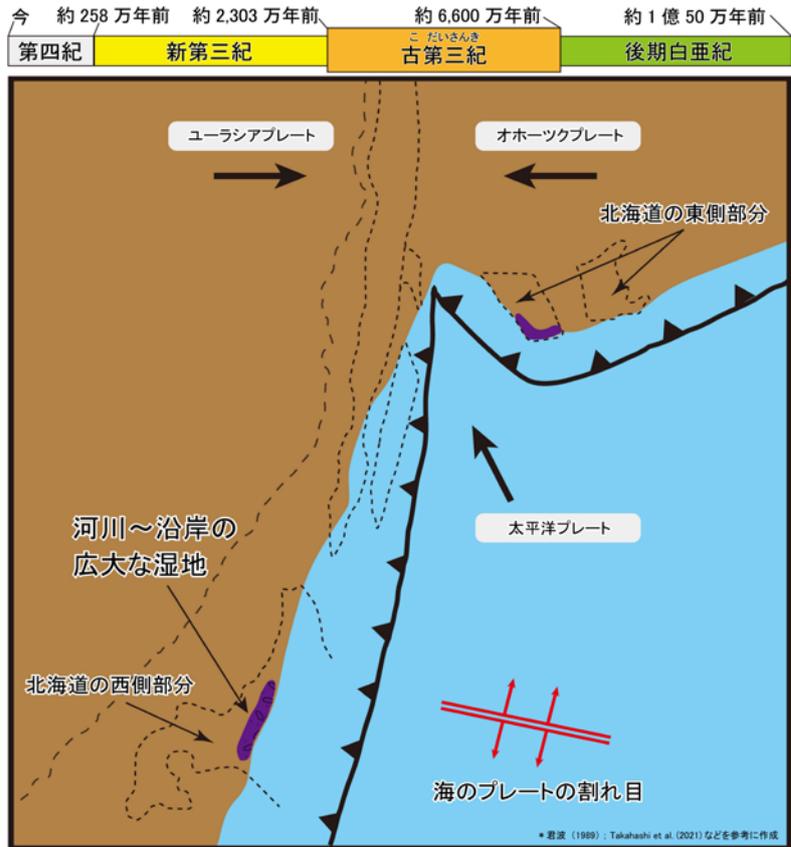
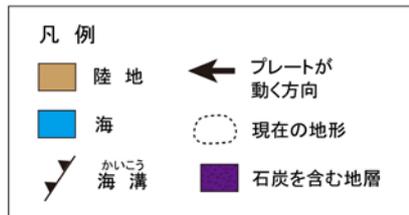


図9 「古第三紀の古地理」の解説パネル

こうきはくあき  
**後期白亜紀** カンパニアン～マーストリヒチアン  
 約 8,000 万～ 6,600 万年前

約 8,000 万年前、北海道の西側部分は、今の中国などがある大陸の一部でした。東側部分は、遠く離れた場所で火山活動を伴う島々(古千島弧)でした。広大な大陸では恐竜が歩き回り、海ではアンモナイトが悠々と泳いでいました。

この頃、東アジア大陸の沿岸では「蝦夷層群」、古千島弧では「根室層群」と呼ばれる、砂や泥からなる海の地層が堆積し、アンモナイトの化石が保存されました。

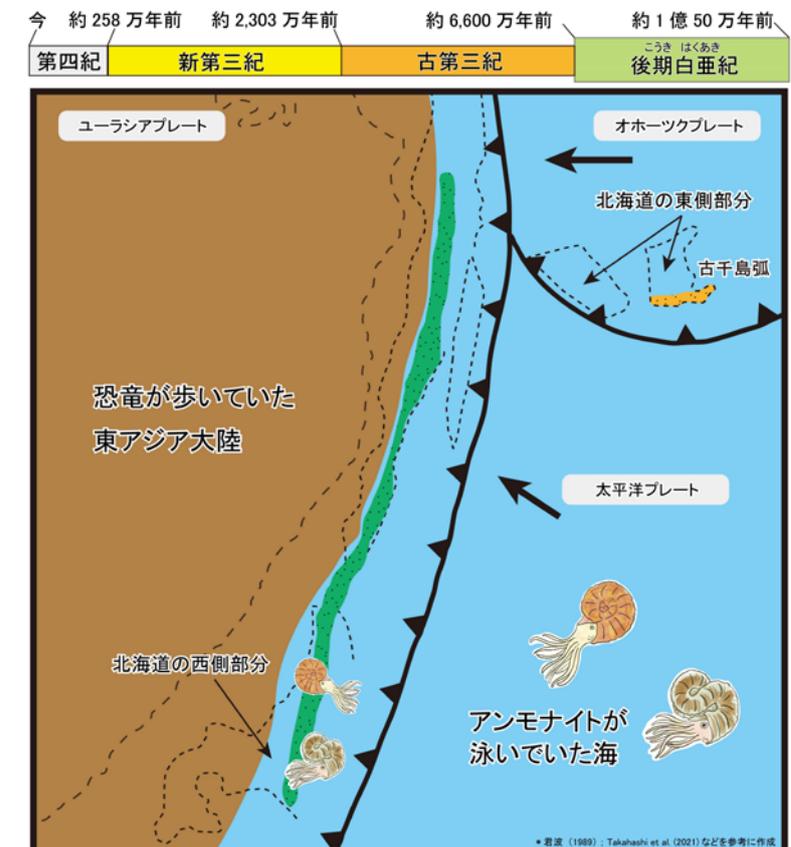
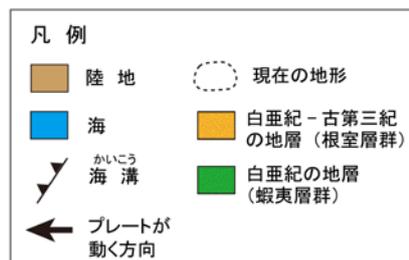


図10 「後期白亜紀の古地理」の解説パネル

以上のように、データを取りまとめて、図7～10の解説パネルを作成した。また、これらをデジタルサイネージでも表示できるようデータを作成した。

### (3) 第2章 私の自慢・思い出のアンモナイトたち

#### (3)-1 展示内容

本章では、化石会の会員 14 名が出品するアンモナイト化石などを、個人ごとに展示ケースを分け、化石にまつわる自慢・思い出のエピソードを記載したパネルと共に展示した(写真14)。

化石は、アンモナイトをはじめ、ウニやサメなど計152点である。大きさや種類(形)、産出する時代や産地も多種多様であり、長年培った巧みな技術によってクリーニング(化石の周囲の余分な石などを取り除く作業)された化石である(写真15、16)。また、化石にまつわるエピソードは、化石に興味を持つきっかけになった化石、化石会入会時に採集した化石、初めて自らクリーニングをした化石、非常に珍しい化石、あるいは愛犬が見つけた化石など、それぞれの興味深い自慢・思い出を展示した(表3)。

#### (3)-2 展示準備

出品する化石は、当館の展示構成チームと化石会で協議し、2つの条件を設定した。1つ目は、「所有する化石の中でも、特に観覧者に見てほしい自慢・思い出の化石であること」である。この「自慢・思い出の化石」とは、いわゆる化石の学術的価値だけを示すものではなく、会員個人が「自分の人生において重要と感じる化石」を示す。当初は、「自慢の化石であること」とする想定であったが、化石会から「自慢と限定してしまうと、入会から日の浅い会員や手持ちの化石が少ない会員などが出品に躊躇してしまう可能性がある」との指摘を受けたため、「思い出」を追加した。2つ目は、「出品する化石の内、少なくとも1つには、その化石にまつわるエピソードを添えること」である。文章は、会員それぞれに作成してもらうことを基本とし、文字数は観覧者が気軽に読めることを目指して200文字程度、最大400文字以内とした。一方、自分に関するものではあるものの、会員が文章を執筆する機会は乏しく、苦手意識を感じてしまい、化石の出品を躊躇する可能性も想定された。そこで、文章の作成が困難な場合は、会員を対象に実施したアンケート調査(本章(4)で後述)、あるいは別途聞き取り調査を実施して得られた情報を基に、学芸員が執筆することも可能とした。

次に、出品する化石の数は、これまでに開催した展示会を振り返ると、数多くの化石を展示することが愛好家にとって、また観覧者にとっても望ましいということは

認識していた。一方、本展では上述のとおり、化石と共に会員(人)を感じてほしいという目標があること、さらに種々のコロナ感染症対策を考慮して、展示作業をする側も、観覧する側も安心できるように工夫する必要があった。そのため、今回は約150点と限定することとした。加えて、露出やハンズオンも可能な大きな化石の展示も議論されたが、コロナ感染症対策の観点から断念せざるを得なかった。これらの諸条件等を基に、出品する化石の選定などは、化石会が調整を担当することとなった。

出品する化石が選定された後、学名、数、大きさ、産地などの情報と、エピソードの原稿を当館に提供してもらった。これらの情報や原稿を基に、学芸員が使用する展示ケースを選定し、資料キャプションや解説パネルな



写真14 「第2章 私の自慢・思い出のアンモナイトたち」の展示



写真15 化石会の藤原会長の展示(一部)



写真16 化石会の富田副会長の展示

表3 会員の自慢・思い出のエピソード

氏名	学名	自慢・思い出のエピソード
富田 秋男 氏	<i>Prionocyclus aberrans (cobbani)</i>	化石に興味を持ったのは、三笠高校に入学したとき、三笠の桂沢ダムの建設中で、三笠高校の菊地正昇先生が、「ダムが完成するとダム内にある中生代白亜紀の地層が埋まってしまって世界的に貴重なアンモナイトが失われる」ということで、三笠高校の生徒に手伝ってもらって収集していたので、それに参加したのがきっかけでした。 この化石は、私が化石会に入会した昭和45（1970）年に、空知管内の河川の砂防工事の時に採集したものです。
八島 一夫 氏	<i>Menuites</i> sp.	小学2年生頃にもらったアンモナイトのかけらが一番のお気に入りです。当時は植物か何かの化石だろうと思いましたが、高校生になってからはアンモナイトの「縫合線」ということが判明しました。「縫合線」の不思議さに魅かれ、いつかはアンモナイトを採ってみたいと思うきっかけとなった化石です。今では、ほぼ完全なアンモナイトを採取することもあります。約半世紀（およそ55年前から）ずっと大切にしていた化石です。
佐々木 孝 氏	<i>Neomphaloceras</i> sp.	化石に興味を持ったのは、若い時に初めてつれてもらった化石採集の時に、アンモナイトを見つけて楽しかったことがきっかけです。その後、化石会のKさんとの出会いで入会しました。 この化石は、10年以上前、空知管内にあるなじみのフィールドを訪れた際に見つけたものです。これからも、元気なうちはずっと化石採集を続けたいです。
小川 益弘 氏	<i>Anagaudryceras howarthi</i>	化石採集を始めて2年目、空知管内の川に向かう途中、林道を走っていると雪解け水が流れるような窪み状の場所を発見。誰もが通りすぎるような場所だが、車を止めて覗いて見ると、15センチ四方の石を発見。アンモナイトの一部が覗いている、山で石を割ると碌なことがないので、そのまま家へ持ち帰りました。家でクリーニングを始めたが、実は本格的にクリーニングを行うのは、この石が初めてでした。苦勞のすえクリーニングが終了。 自分にとって、初めてクリーニングをした化石であり、後に、あまり多産しない種類であることが分かったこともあり、思い出の一品となっています。
伊豆 齊 氏	<i>Anagaudryceras limatum</i>	見つけた時点で川の水でだいぶ削られており、化石の部分はほぼ今の状態でした。普段であれば、ノジュールを割り、出てきた化石は全体が見えるようきれいにクリーニングするのですが、この化石はきれいに見えているので、あえてそのままにしています。これまで集めた何千点ものなかで、このような化石は唯一なので、この中では特に思い出深い化石です。
藤原 寛一 氏	<i>Oxytropidoceras</i> sp.	アルビアン階（約1億1,300万～1億5000年前）の地層が露出する地域での巡検調査、何時もの様に最後尾を歩きました。これが私のパターン。枝沢最上流部にて、片手に乗るほどのノジュール。片隅を割ると直ぐに痕跡が。然し複雑そうに見える痕跡、心の中ではドビレセラスの一種（ <i>Dovilleiceras</i> sp.）。其れから6～7年と冬眠。 何と産出個体数も非常に少ない「オキシトロピドセラス」。保存状態がよく立派なキールに薄く高く流れる様な立派な肋が。 これが私のアルビアン階の宝物です。
谷口 治樹 氏	<i>Gaudryceras hamanakense</i>	本州では連日猛暑日が続く中、道東地方特有の肌寒く湿気も感じる気候の中で私は、愛犬「ゴン介」君と、釧路管内に化石を探しに出発しました。雄大な道東の道を走り、きれいな海岸線を走り、やがて小さな漁村に到着。コンブ干場に注意しながら車を進めていくと、どんよりとした灰色の太平洋が出現。晴れたら最高の景観だろうと思いつつも、早速海岸線に移動。足場の悪いガレ場を少し歩くと、砂岩が露出した場所（露頭）が出現。私はわくわくしながら化石の探索を開始しましたが、なかなか化石を発見できません。しばらくして後の方の波打ち際でゴン介君の吠える声。助けを求めているのかと、ししぶい迎えに行くと、なんとその足元には砂岩の塊が、そしてその中にはアンモナイトの影が！ やった、でかしたわが愛犬よ。待ちに待ったゴードリセラス・ハマナカエンゼ発見。 その後、私は満足感を抱きつつ帰路へ。そして助手席にも満足そうに寝息を立てている「ゴン介」君がいました。 今はもう、この露頭も「ゴン介」君も在りませんが、このゴードリセラス・ハマナカエンゼは、特に私の思い出の詰まった化石です。
唐沢 直道 氏	<i>Collignoniceratidae</i>	数年前の6月、先輩S氏から「留萌管内の川の支沢にアンモナイトを採りに行こう」と誘いがありました。入ったことのない沢だったのでうれしい話でした。ノジュールを探しながら沢を上ると、二股に分かれており、右方向の沢を今回のポイントに選びました。ハウエリセラスを中心にサントニアン階（約8,630万～8,360万年前）の地層の化石を採取、リュックはノジュールで満たされ、心地よい重さの巡検となりました。 秋になり、この年同地域の最後の巡検。狙いは6月に入った支沢の左の沢。沢を上り二股から左の沢に入りました。ノジュールを見つけ、ハンマーをあてると肋の強い化石が顔を見せました。珍しいアンモナイトだと思いました。 クリーニングを終え、後日、F氏宅に化石を持ちこみ、同定してもらおう（どの種類かを調べてもらう）ことにしました。F氏も「見たことのある化石だけど即答はできない」という話でした。しばらくして、F氏から「知り合いが、コリンニョニセラス科の一種（サブモルトニセラスの一種の子どもの可能性も？）ではないかといっていた」という回答がありました。

氏名	学名	自慢・思い出のエピソード
都築 三四男 氏	<i>Jimboiceras planulatiforme</i> <i>Gaudryceras denseplicatum</i>	小学生の頃、通学路の崖から二枚貝、葉の化石が取れたので、自然と化石に親しんでいました。本格的にアンモナイトに興味を持ったのは就職後。仕事の関係者の自宅で見せてもらった、アンモナイトの美しさと種類の多さです。化石会入会後は、たくさんの方と展示会、懇親会等で交流を深め、アンモナイトの種類、産地、クリーニングの道具、方法等知ることができ、色々な地域の会員と一緒に化石採取に行くこともできました。この化石は、最後に化石採取に行った時、空知管内の川の崖から採取したペアーのアンモナイトです。
濱田 琢朗 氏	<i>Sharpeiceras</i> sp.	化石採集を始めた年に、穂別博物館に行きました。その帰りに何気なく寄った川が誰も化石採集に入っていない様子で、その日は、ポリプテコセラスを見つけて帰宅しました。まだ何か見つかりそうな気がして、1週間後に再度同じ川の別の場所を訪れたところ、この化石を発見しました。
正源 直行 氏	<i>Hauericeras angustum</i>	採取した場所へは、今では廃道となった真っ暗なトンネルをいくつも通り、更に崩れてもおおしくない橋や削れて穴の開いた林道を、いつもの仲間と自転車で1時間以上かけて行きました。そこは、クマの住みかと思われるぐらゐの足跡がたくさんある場所で、警戒しながら探索しました。運よく河原で見つけたひとつです。
竹田 徹 氏	<i>Anagaudryceras limatum</i>	このアンモナイトは、三笠市立博物館ボランティアの会の皆さんと一緒に化石観察研修会に参加したときに採取しました。採取する際には、ベテラン会員の方に、いろいろとアドバイスをいただき、見つけることができました。
岡島 孝義 氏	<i>Hypoturrilites komotai</i>	この化石は、20年くらい前に採取しました。化石会50周年の展示会ということで、最近あまり見つからないこの化石を出品しました。私は化石を探し始めて40年ほどになります。私が若い頃は、日曜日だけが休みだったので、仕事を終えた土曜日の夜に出かけ、日曜日の朝くらいから一日中化石を探していました。せっかくなので探しても、化石を見つけれないときもありました。その分化石を見つけると嬉しくて、運ぶには辛いくらい重い化石も、がんばって運んでいました。家にはこの何倍も化石が保管されています。
加藤 慎也 氏	<i>Tetragonites glabrus</i> <i>Yezoites</i> sp.	この化石は、10年ほど前、よく化石を探しに行く留萌管内の河原で見つけたものです。その時は一人で採集にいきました。化石会の集まりがあった時に、まだ一部しか見えていなかったこの化石を持っていき、会員にクリーニングの仕方アドバイスをもらい、自分の手で掘り出しました。私は、幼少のころから恐竜や化石が好きで、小学校6年生の夏休みに従兄弟と中川町で採石して、アンモナイトや貝化石が採れて、そこからずっと興味を持っています。化石は、本当に楽しいです。何が入っているかわからない石を割ったり、クリーニングをしたり。展示や鑑賞もできます。健康であれば生涯続けられることなので、体が動かなくなるまでずっと長く付き合ひ、化石会の仲間と話をしていければと思います。そして、一人でも多くの方に、北海道は化石が多く採れる、魅力ある地域だと知ってもらえればと思います。

どを作成した。化石の展示に当たっては、個人宅の室内や倉庫などに保管されていたことを考慮して、まず展示室外で化石の保管・搬送用の箱を開梱し、化石の状態、汚れや文化財害虫の有無などを目視により確認して、アルコールを用いた清掃作業を行い、その後、展示室内に搬入して展示作業を行った。

#### (4) 第3章 アンモナイトと関わる人たち

##### (4)-1 展示内容

本章では、化石会の会員や地学担当の学芸員といった「アンモナイトと関わる人」がどういった人たちなのかわかりやすく伝えることを目的とした。そのため、地質図や化石のような実物資料ではなく、聞き取り調査で得られた情報を会話形式で記載したパネル中心の展示とした(写真17)。以下、本章の展示内容を紹介する。なお、括弧内はパネルのタイトルである。

##### ①基本情報と学芸員の仕事の紹介(「化石と関わる人々」～「学芸員のお仕事 その2」)

導入として、「化石と関わる人々」では、化石会の藤原会長、小川事務局長と圓谷、久保見、尾曲3名を紹介

した(図11)。次に、「学芸員のお仕事 その1」では博物館に化石が収蔵されるまでの流れを説明し、併せて化石会あるいは会員から寄贈されたアンモナイト化石を展示した。「化石ってどうやって探すの? その1、その2」では、藤原会長と小川事務局長に説明してもらったことで化石の探し方や必要な道具類、コツなどを記載した。「学芸員のお仕事 その2」では、地学担当の学芸員の調査研究において、化石を採集する以外の作業があることを示した。また、学芸員が野外調査で用いるクリノメーターやピックハンマーなども展示した。

##### ②化石会の成り立ちと活動(「化石会の活動」～「一年間の活動」)

化石会の成り立ちから現在に至るまでと、一年間の活動内容を会話形式あるいは年表にした(図12)。一年間の活動のうち、新年会では会員同士がその年に採集した、あるいはクリーニングをした、これまで化石会で披露していない化石を持ち寄り、品評会をして翌年の化石会の年賀状に掲載する化石を決めるというエピソードにちなみ、年賀状を3枚展示した。



写真17 「第3章 アンモナイトと関わる人々」の展示

### ～化石と関わる人々～

化石と関わる人と聞くと、どんな人を想像しますか？  
研究機関に所属し、発掘して論文を書くような人（大学の先生など）はイメージしやすいかもしれませんが、それ以外にも、今回の展示会に関わった博物館の学芸員や、ほかの仕事しながら化石を探し、クリーニングをする北海道化石会の会員のような人もいます。ここでは、学芸員と化石会の会員がどのような人で、日ごろどのようなことをしているのか、紹介します。

博物館の学芸員と北海道化石会の会員紹介

 尾曲 美織 学芸員 普段は北海道内各地に出かけ、お年寄りから若い人まで、いろんな人々に家や地域のおもしろいところや化石の話を聞かせるのが好きです。化石会にはどんな人がいるのか紹介するため、皆さんの代わりに各会員に質問します！この章の担当です。	 丸谷 隆史 学芸員 主に新生代（アンモナイトが絶滅した後の時代）の貝の化石を研究しています。この展示会のため、博物館に寄贈されたアンモナイトはどれくらいあるか、久保見さんと一緒に整理しました。この展示会では、第2章の担当です。	 久保見 幸 学芸員 今年度北海道博物館の仲間になりました！大学院では、北海道をはじめとした白亜紀（アンモナイトがいたころ）の地質や地質年代について研究していました。この展示会では、第1章の担当です。
 藤原 寛一 さん 北海道化石会の会長。 三笠市出身。	 小川 益弘 さん 北海道化石会の事務局長 （みんなの活動をサポートする人）。 夕張市出身。	

図11 「化石と関わる人々」の解説パネル

### ～一年間の活動～

一年間の活動はいつどうやって決めるんですか？

4月の総会で、その年度に何をするかを決めるんだ。例年6月に探石会、9月に野遊会、10月に三笠市民文化祭で展示、1月末から2月中旬に新年会をするよ。

探石会は皆で化石を探しに行くんだよ。野遊会では午前中に化石採集、お昼頃からジンギスカンを食べるんだ。新年会では皆で集まり、それぞれの化石を見せあって、翌年の化石会の年賀状に載せる化石を決めるよ。

自分の持ってきた化石が年賀状用に選ばれたらうれしいですね。もし選ばなくても、次の新年会に向けて珍しい化石を探したり、きれいにクリーニングしようという気持ちになる気がします。

こうやって会員同士交流を深めているんですね。市民文化祭での展示だと、見に来てくれた人と交流もできますね。

市民文化祭や博物館の展示会を見に来てくれたり、クリーニング体験をした小学生の子が化石に興味を持ってきて、後日その子と親と一緒に化石を探しに行ったこともあるよ。やっぱり興味を持つ人が増えるとうれしいね。

図12 「一年間の活動」の解説パネル

### ～アンモナイトとの出会いとその魅力～

アンケートによれば、三笠市や夕張市の出身で、子どもの頃から化石に親しんでいたという回答が複数ありました。夕張市出身の、小学校の通学路沿いの崖に二枚貝や植物の化石があるのを見かけて、興味を持ったというエピソードはその一例です。

私は就職してから、ダムの嵩上げ工事に関連して化石の調査をすることになり、部下と一緒に化石を探そうになったんだ。今思えば、小学三年生の頃に、同級生が自分の父親がとってきたアンモナイトを先生に自慢していたのがずっと心に残っていたのもきっかけかもしれない。

私は三笠高校に通っただけだけど、そこで菊地先生と出会ったことがきっかけかな。夏休みには先生と一緒に山に行き、今はないポンポン船に乗って桂沢湖を渡り、山に入ったんだ。7時半から15時半くらいまで、ほぼ一日中化石を探し回ったのは良い思い出だな。

その他にも親や従兄弟と一緒に探しに行ったことがきっかけになった人、博物館で化石クリーニング体験に参加したことがきっかけになった人もいました。

見つけたときに感動できるのが魅力、という人が多そうだね。山や川を歩いてストレス解消になるって人もいて、アンモナイトをきれいにクリーニングできたときや、それを見た子どもが興味を持ってくれるのがうれしいという人もいます。

図13 「アンモナイトとの出会いとその魅力」の解説パネル

③アンケート調査の結果（「化石会の会員ってどんな人？」～「化石会加入のきっかけと変化」）

ここでは、後述するアンケート調査を基に、化石会会員がいつアンモナイトに興味を持ったのか、どのようにして化石を探すのか、持ち帰る化石の基準と保管方法、そして化石会に加入したきっかけなどを会話形式で展示した（図13）。

#### (4)-2 展示準備

##### (4)-2-1) 前提

本章の担当者は民俗学が専門であり、普段は地域社会においてどういった暮らしがあり、習俗が伝承され、変化しているのか、そしてそれらに影響を与える要因や、人々の行動の基点となる内面の動きに着目して調査を行っている。民俗担当の学芸員は、展示であれば、衣食住や冠婚葬祭、祭礼、民俗芸能などをテーマとすることが多く、今回のような、いわゆる自然史で扱うことが一般的な資料を対象とした展示に関わることは多くない。今回は、化石会の方々と、北海道内における化石を媒介とした人々の集まり／まとまりと捉え、彼らが共有していることが何なのか、何が引き継がれているのかといった視点から調査を行った。

なお、本章で気を付けたことは、聞き取り調査を通して明らかになった、①化石会の会員にとってアンモナイトとのかかわりは重要でありつつも生活のすべてではないこと、②アンモナイトとの関わりは、日頃働きながら休日に自分の時間を使って好きなことをする、その際の選択肢の一つである、という点を伝えることである。ここが、好きなものを通じて人生を豊かにしたいという多くの人に共通する点であり、観覧者が会員に共感し、会員とアンモナイトとの出会いやかかわり方を自分に引き寄せて考えることでより楽しんで観覧してもらえると考えた。

##### (4)-2-2) 準備作業

本章において、化石を扱うことのない立場から考えられる「多くの人が知らない基本的な事項」を取り上げるべき点と考え、①化石が展示されるまでの流れ、②化石を扱う人としての学芸員の仕事、③化石会の成り立ちと活動、④化石会の会員が化石に興味を持つきっかけと関わり方の4つを軸として紹介することとした。この4点について、聞き取り調査を基本とし、アンケート調査も実施した。

③については、「北海道化石会発足50周年」と題した展示会であるが、化石会がそもそもどういった組織で、誰が加入し、どういった活動をしているのか、という基本情報はこれまで紹介されてこなかった。そこで、まず設立の経緯を明らかにするため、化石会が所有する資料、

三笠市史なども参照した。④については会員に直接聞き取る前に、各会員に共通するところとそうでないところを把握するため、アンケート調査を行った。

##### (4)-2-3) イラスト制作

本章はパネルを主とした文字での説明が中心となる。文字ばかりのパネルでは読み手が退屈してしまうこと、疲れてしまい最後まで読んでもらえない可能性があることを考え、会話形式で文字数を抑えることとした。また、登場人物のイラストを用いることで、柔らかい印象をもたせた（図11）。このイラストは、過去の展示会で関わりのあったデザイナーに制作を依頼した。

##### (4)-2-4) アンケート調査

令和3（2021）年9月に、化石会会員を対象としたアンケートを郵送して実施した。質問項目は氏名、生年、職業、化石会への加入年のほか下記のとおりである。

- 1 化石を探すようになったきっかけは？
- 2 化石とのかかわりで最も魅力を感じているところを教えてください。
- 3 化石会へ加入したきっかけを教えてください。また入会して変化したことがあれば教えてください。
- 4 化石を探しに行く季節はいつですか？その理由も教えてください。
- 5 化石を探す場所の選定条件を教えてください。
- 6 あなたが化石を見つけるために意識していることや見つけるコツを教えてください。
- 7 持ち帰る化石の基準や条件を教えてください。
- 8 化石の保管場所はどのように確保しているか、教えてください。
- 9 あなたのお気に入りの化石の名前と、その理由を教えてください。
- 10 あなたの今後の目標を教えてください。
- 11 自由記述（例：道民に伝えたいこと、あるいは北海道博物館へのご意見）

アンケート調査の結果は表4のとおりである。当時の会員30名のうち、14名からの回答を得た。生年は上が昭和14（1939）年、下が昭和55（1980）年までと幅広いものの、割合としては昭和20年代から30年代が最も多く、会員の語るように高齢化が進んでいるといえる。職業は、退職者も含め会社員や公務員が主で、第一次産業従事者が1名、無回答が1名であった。少なくとも研究活動で生計を立てている人はおらず、収入を得るための仕事をもちながら化石を探す人々である。加入した際の年齢は平均44歳で、おおよそ仕事も落ち着き、子ど

表4 化石会へのアンケート結果 ※一部の個人名、地名は●●と表記

番号	青年	職業	加入年	1	2	3	4	5
1	1965年	公務員	2005年	長男が北海道博物館で開催した「アンモナイト展」の化石クリーニング体験に参加したことから、子どもたちと一緒に採取してみたいと思い、どこでとれるのかを調べたのが、化石にはまったのがきっかけです。	化石探しは、川の中を歩きストレス解消にもなっている。また、必ずあるものではないので、あった時の感覚は、宝物探しと同じで、歩き続けても疲れを感じない。	家族で化石を探していたがなかなか見つけることができないため、複数の施設で実施していた化石のイベントを見つけては参加していた。その時に「北海道化石会」という存在を知り、当時の国分副会長に声をかけてもらい、一緒に化石採取に連れて行ってもらい、入会するきっかけとなりました。ノジュールの色や形、さらに地質の年代などの理解を深めた。	化石探しは、危険もあるので、川の雪解けがひと段落下6月から10月中ごろまでが主な活動時期となっている。大雨による川の水位が高い時期や土砂崩れの恐れがあるときは避けている。	同じ場所を何回も行くというよりは、しばらく行っていないと思う場所を思い出しては行くことがある。また化石会員の情報をもとに行くこともあります。
2	1980年	会社員	1993年	幼少のころから恐竜や化石が好きで、小学校6年生の夏休みに従兄弟と中川町で採石して、アンモナイトや貝化石が採れて、そこからずっと興味を持っています。	いつでも採れるのではなく、採れない時もあるが、たまにいい化石が採れた時。また行こうという気持ちになる。	塾の先生より、化石採集会があるといわれ、鶴川の川へ行きました。当時国分副会長にいろいろ教わり、親子で北海道化石会に入会致しました。	6月から10月頃までに探しますが、5月は水が多く、10月の中旬からは寒さや初雪があるためです	北海道全体ですが、主に道北・道央圏で、先輩方に教えていただいた川で探しています
3	1961年	会社員	2007年	以前から化石に興味を持っていましたが、休日を利用して博物館に行く程度。採取なんて夢のような話と考えていました。本格的に化石に興味を持ち始める事となったのが、2005年8月の札幌転職がきっかけです。転職先の職場に化石好きの方が何人かいて、話を聞いたたり自宅に持って化石を見せていただいたり、実際に化石採取に同行させていただいたりとすっかり化石の世界にのめりこんでしまいました。	化石の入ったノジュールを見つけ出した時の快感	職場の先輩の紹介で入会しました。化石の基礎的知識の習得、化石採取場所の拡大、クリーニング技術の向上をはかることができました	春から秋にかけて採取に出かけています。草木の少ない3月から5月までは容易に足を運ぶことができる沢尻を中心に採取し、雪解け水が少なくなる6月から10月までは、本流を中心に採取しています。以前は草木の枯れだす9月下旬から再び支沢に出かけていたのですが、熊の出没が多いので、出かけられなくなりました	採取したい化石の種類、採取したい産出年代によって場所を選定しています
4	1949年	漁業	2008年	学生時代化石が好きで、アンモナイトを見て好きになりました。	スーチャーの美しさ	小平の山で故国分博文さんと会ってからです	年がら年中です。夏や浜、冬は海です（私は稚内在住）	時代（白亜紀）選定して、化石の出る時代を調べる
5	1955年	公務員	1989年	小学生の頃の教科書だったような思いが？昭和63年に夕張市登川に居住し、●●さんに会ったこと。	見せる事かな？	三笠の●●●さんに誘われ	2月～11月かな。～9月で今年57回入林	夕張、三笠。もともと夕張岳でしたが、シューパロ湖が大きくなり、入林できる場所が少なくなり、ここ3年くらい、三笠にも入林するようになりました
6	1959年	公務員	2016年頃	小学生の頃、母方祖父の家に行くとき、祖父の知人宅の家に連れていかれ、そこにアンモナイトの置物がたくさんあり興味を持つ。ある日植物化石のようなもののがけらをもらい（現在も保有）、大切にしていた。時が経過し、何かを知りたくて地学の教諭に見てもらったところ「アンモナイトの縫合線」ということが判明し、「縫合線」の不思議さに魅かれ、いつかはアンモナイトを採ってみたいと思った。さらに長い年月が過ぎ、40代前半に大腸から大量の出血で緊急入院となる。入院先の病院に1冊のアンモナイトの本があり、その美しさに「生きて出られたらアンモナイトを採集する」と心に決める。病気は治癒し、退院後知人にアンモナイトの収集家を紹介していただき化石採集を始める。後に、入院した時にあったその本の著者は、その病院で亡くなったことを知る。	・美しさ ・およそ1億年前の未知の太古の化石を採取できる不思議さに心を惹かれる ・化石採集では何が出てくるかわからず、ノジュールを割るときはワクワクする ・割れたノジュールからアンモナイトが出ると感動する	・化石のことは右も左もわからず化石のことをおしえていただくために入会 ・入会し、化石について多くのことを学べた ・いろいろな文献や本を読むようになった。最近では「イカ四億年の生存戦略(ダナ・スターフ)」を読み、軟体部の発見の困難さがわかる	春の雪が解けてから、秋の雪が降るまで行っている。行く回数が多ければ目的のモノを拾えるチャンスも多いと思うため、なるべく多く行っている	硬い石のクリーニングは困難を極めるので、クリーニングがしやすい軟らかめの石のところに言っている。具体的には、小平～中川方面

6	7	8	9	10	11
<p>コツはないですが、始めたころは、見つけるノジュールをすべて割る感覚でしたが、体中が痛くなり疲れるので、最近は探索をしているとなんとなく、目に入るノジュールを割っている、いわゆる「化石と呼ばれる」的な感覚で探しています</p>	<p>まずは、持ち上げられる大きさであること、次に小さすぎないこと、母岩を含めて、40cm程度が限界かな？</p>	<p>物置の一つを化石専用にして、保管とクリーニングをしている</p>	<p>「ユーバキディスカス」自転車を使って、ある山奥まで1時間かけていき、そこで見つけた化石は虹色に輝いていた。見つけたときは、まだ、こんなのが、山奥には残っているんだと感動した。</p>	<p>せっかくの化石は、北海道の魅力となるので、展示会などでは、お披露目できるようにクリーニング技術を高めていきたい。</p>	<p>北海道には魅力のある化石があるので、子どもたちには経験してほしいと思っており、化石の魅力を体感してください。化石探し（観察）には、危険もあるので経験者と一緒に行ってもらいたい。実際に山の中は、熊の足跡がたくさんあります。くれぐれも気を付けてください。</p>
<p>川の中、崖の下等色々見て探しますが、ある程度、遠くを見て長年の経験、勘で探しています</p>	<p>ある程度石を割って削り、少しでも軽く運びやすい状態にしていかないと体力がなくなり、石をおいていくことになるからです。原則は、化石が取れた場合すべて持ち帰るようにしています</p>	<p>保管場所は、地下室にクリーニングおよび展示として利用しています</p>	<p>アンモナイト「ファンゲア」マキヤ渦が少ないが、入り口が大きく、現在のオウムガイも形が似ている</p>	<p>仕事が現役で中々時間がなく、行く回数は少ないですが健康であれば生涯続けられることなので、体が動かなくなるまで、ずっと長く付き合いたい化石会と仲間で話しをしていければ良いと思います</p>	<p>化石は、年寄りの趣味のイメージがありますが、石を割り、何が入っているかわからない本当に楽しく、一人でも仲間でも自由にかつ時間がなくてもクリーニングをして、展示や鑑賞できる。一人でも多くの方に北海道は化石多く採れる地層があり、場所もあるため、魅力のある地域だと思います。</p>
<p>転石を中心に採取しているので、川の中の石溜まりというポイントを意識しています。化石を見つけたコツは、ゆっくり探すことです</p>	<p>欠落のひどい化石、状態の悪い化石（泥アンモ）以外は大小問わず持ち帰っています</p>	<p>家を建築するときに遊び場所感覚で半地下構造の家を建てました。今では化石のクリーニング場所、保管場所と化しています</p>	<p>ポリブチコセララスです。何度もUターンを繰り返していくところに魅力と美しさを感じます。クリーニングが面白くて、Uターンが始まるとワクワクします</p>	<p>採取した化石のほとんどがサントニアン以降の化石ばかりなので、それ以前の化石を見つけてみたい。クリーニングの終わった化石のデータ化をやってみたい</p>	<p>化石に興味のある方、北海道化石会へ</p>
	<p>ある程度保存のいいモノだけ</p>	<p>部屋六畳間に</p>	<p>メタブラセンチセララス、ホルベシセララス、キャナドセララス、やっぱりスーチャー（縫合線）です</p>	<p>自分の手元にまだない石、ニポニテスかな</p>	<p>化石の良さを知ってほしい</p>
<p>行ってみる、探してみる、行くことかな</p>	<p>基本、一人なんで、もてる大きさのモノ</p>	<p>工事現場とかにおいてある小屋（スーパーハウス）を置いて保管中。あとは納屋かな。</p>	<p>インターかな。なんかきれい！</p>	<p>元気なうちは一人でアンモ探し！</p>	
<p>まめに探すこと、ゆっくり探すこと、何度も同じところを探すことを心がけている</p>	<p>コレクションしていない化石のみを持ち帰るようにしている</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・整理途中だが、趣味の部屋に棚を作りおいている</li> <li>・玄関にケースに入れて飾っている</li> <li>・時々見たい化石は自室においている</li> </ul>	<p>メヌイテス スツネリ（旧アナバキディスカス 16センチ）飾るにもちょうどよく、芯までありアンモナイトらしくてよらしいと思っている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クリーニングしていないノジュールをクリーニングすること（クリーニング部屋はある）</li> <li>・クリーニングが上手になりたい</li> <li>・動物化石を拾いたい</li> <li>・（軟体部の発見はあきらめた）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・化石愛好家向けに講習会があればうれしい</li> <li>・研究者とアマチュア収集家の接点の場面がほしい</li> <li>・北海道のアンモナイトは世界に誇れると考えるので、北海道博物館にも常設展示があればよい</li> </ul>

7	1946年	公務員	2006年	小学校3年生のとき、クラスの男子生徒が先生に向かって「父さんが山でアンモナイトを探ってきた」と、さも凄いものを探ってきたように自慢げに話していた。一般人が車を持っていない時代である。たぶん近くの山(万字ドーム)へ竹の子採りに行って採ったものと思うが、このことが、ずっと頭の底に残っていた。市役所に就職し、教育委員会勤務となったとき、部下として古生物(植物)研究で博士号を持つ●●君が配属されてきた。しばらくすると、国からダムの嵩上げ工事で水没する地域の化石調査を委託されたので、一緒に行きませんかと声をかけられ、その調査に2~3度同行したのが化石に興味を持つきっかけとなったが、小学生の時の記憶が影響しているのかもしれない	山へ化石を探しに行くことが最も好きです。北海道には約500種のアンモナイトがあるといわれています。貴重なアンモや自分が持っているアンモを発見すると、喜びを感じます。もともとが山育ちなので、化石を探しながら、おまけとして山菜やキノコを採ったり、植物にも目が行く方です。夕張岳登山でよく目にした「シラネアオイ」や「ミヤマハンショウヅル」そして蛇紋岩地域にしか自生しない「天塩小桜」などを化石採取中に●●川沿いで確認しています。	同じ職場にいた化石会会員さんから入会を勧められたこと。入会して変化したこと、展示会がちょいちょいあるので、毎度、同じものを出すわけにはいかないのので、大変なクリーニング作業をするようになったこと。	積雪期以外は、季節に関係なく化石を探しに行きます。季節ごとに狙い場所があるからです。	まずは、他の人が入っていないような場所を選定します。地元のシューパロ川に限ると、川の水量、濁り、湖水の水位などにより選定します。春は、雪解け水の増水と濁りで川の対岸にいけない場合があります。この場合は、何時ごろになったら先に行くか推測し、人より先に行くよう心がけています。夏の湧水期は川の中です。秋は人の動線を外して歩くよう心がけます。
8	1947年	公務員	1995年	小学生の頃、通学路の崖から二枚貝、葉の化石が取れ自然に親しんでいた。本格的にアンモナイトに興味を持ったのは就職後。仕事の関係者の自宅で見せてもらった、アンモナイトの美しさと種類の多さです。	もともとアウトドア好きですが山や川原でのノジュール探し。最初は数多く割ってしまい、今考えると残念です。ノジュールの有った時の喜び、どんなものが出るか楽しみみです。また仲間との昼食の語らい等たくさん楽しみがあります。	化石探しに行き、山中で化石会員に出会い、話をするうちに入会を勧められた。たくさんの方と展示会、懇親会等で交流を深め、アンモの種類、産地、クリーニングの道具、方法等知ることができた。また色々な地域の会員と一緒に化石採取に行くこともできた。	現在病気のため化石採取にいけないが、当時は雪解け後に一番多くいらったと思う。凍結融解後の崖からのノジュールの落下等により探しやすい。雪解け後、また大雨後の増水により、川原が荒れたタイミングで探しに行く。	化石仲間と相談し場所を決めていた。またアンモナイトに詳しくなると、また持っているアンモナイトの採取できる場所に行くようになった。
9	1956年	会社員	2006年頃	自分が小学生の頃に父親と一緒に木石などを取りに行き、その後亀甲石を取りに行ったとき、河原で菊の模様が入った石を見て、それがアンモナイトと後日判明して、それから化石に興味を持ったのが、今から50年前の話です。本格的に採取を始めるのは化石会に入会してからとなります	珍しいアンモナイトを採取してきた時、他の人が持っていないもの、または完全体的な化石を見つけたとき	亡き父親が化石会に入会していて、それで自分も…。今はほとんど参加していませんが、各博物館等の展示等化石会に入会していなければ、個人では出来ないこと、自分で採取した化石が博物館等で展示されること	春先から終秋まで。採取のタイミングは大雨後です	化石が濃い場所(例:サントニア)、異常巻が見つかる場所(チューロニア)、採取する人が少ない場所(小沢)
10	1939年		1970年	昭和30年に三笠高校に入学したとき、三笠で桂沢ダムの建設中で、三笠高校の菊地正昇先生がダムが完成するとダム内にある中生代白亜紀の地層が埋まってしまつて世界的に貴重なアンモナイトが失われるということで、三笠高校の生徒に手伝ってもらって収集していたので、それに参加したのがきっかけです。	例(化石を探しに行くことそのもの、みえないところから化石を見つけ出す快感、クリーニングできれいに取寄せたときに喜びを感じる、そもそも化石の形が好き、等)の通り	実家が三笠の弥生で履物店をしていたので自分は長男でしたので札幌の履物店に修行のために7年間務めたので、親に帰ってきてくれといわれ、三笠に帰り、2年くらいしてから知人に誘われて入会しました。又炭坑が閉山になったところに一時的に休会。	春、雪解けで川の水が引いたところが河原が変化しているので、一番期待ができるので多くいきます。そして秋の雪が降るまで行きます。	川を歩いていると、川岸に所々に崖があります。その崖に化石が多く含まれている地層が時々ありその下流を丹念に探します
11	1960年	会社員	2003年	小学校3年生の時の遠足で二枚貝の化石を見つけたときからでしょうか。場所は福井県勝山市滝波川上流です。もう1km上流だったら、恐竜の化石を発見できたかもしれませんでした。	山や川の中で化石に出会えるときめき。この化石が何千万年も前に生きていた、その出会いのロマンでしょうか。	大人になり、北海道に転勤をした際に、同僚に化石会の人々がきれいにクリーニングされた化石を見せてくださったことで、化石にはまりました。(山の飲み会がメインですが)	春でしょうか。雪解け水のひいたころ。雪解け水の勢いで岩盤が削られ、川の中のノジュールが現れるからです。あと、草とか木とかが少なく、ノジュールを発見しやすい。虫がいない!(ダニに注意)	地層図を見て、化石のある地層の地域で、川があり、崖があり、化石の服務ノジュールが露出しているところ。
12	1942年	製造業	1985年頃	高校2年生(三笠高校)の時に学校にアンモナイト研究と幾春別川流域の地層等の論文を出した菊地正昇先生との出会い	想像力を超えるアンモナイトの变化力。太古の世界から現世に生まれ変わる時の魅力。本来の形容の素晴らしいアンモナイトをどの様にクリーニングするかによって多くの人達にその魅力を伝えられるか考えながらのクリーニング	職場内に熱心な会員がいたので。入会後数年は名だけの会員だったが、会の運営の協力等もあり、組織的に行動を起こすようになり、今までの知識をより深めることができた	雪解けの春一番、露頭の多い林道等。冬の凍結等により、ノジュールが浮き出たり、落下するため。山菜の土産品が多い時期。真夏の高温時は避ける。	季節によって変える。とりたて化石によって時代の地層等を目当てに。
13	1950年	シルバー人材センター	1985年	若い時に初めてつれていってもらった時に、アンモナイトを見つけて楽しかった	ノジュールを見つけて、中からアンモナイトが出てきた時	国分さんとの出会いで入会しました。入会したことで地方に行く事が多くなりました。	春、雪どけ水で水位が増えたり、ガケくずれなど	本流の小沢など
14	1951年	調理員	2013年	石に興味があった	化石を見つけた時	知り合いに話しを聞いて、今まで以上に化石が好きになった。	年中、特に冬、北海道は6月、冬は暑くなく草木が茂ってないから	人のいないところ

圓谷昂史ほか 北海道博物館第19回企画テーマ展・北海道化石会発足50周年記念展の報告

じっくり、粘り強く探すことで	35cm以上の大型化石以外は、持ち帰ります。小型の化石はクリーニング教室などのイベントの時、教材や子供へのプレゼントとして使用します。	貴重な化石を持っていないので、車庫の奥に棚を作り、段ボール箱に梱包し揃んでいます。ノジュールは、家の周囲にゴロゴロ転がっています。	「ユーパリスラス」です。理由は、地元夕張の名が冠されていること。また、あまり多産しないアンモであるが、夕張地域では、ほかの産地より比較的、多く産出すること。	特にありません	北海道は、世界的に有名なアンモナイト産出地で、アンモナイト研究者のあこがれの地といわれています。外国の産出地の多くは、母岩に直接、アンモが入っていますが、北海道のアンモは、ノジュールという固い塊の中に入っており、二重に保護されているため、保存状態の良いアンモが産出します。また、世界的に稀な異常巻アンモナイト「ニッポニテス」の産出地でもあります。北海道はこのように良質のアンモナイト産地でもありますので、アンモナイトに興味を持つ人や愛好者の方が増えてほしいと思います。
最初は崖中心に探していたが、年を重ねるとノジュール探しが楽な川原探しが多くなり、後半は異常巻の産地に行くようになった。川原探しは場所を決めるとジグザグに歩き、露出しているノジュールをくまなく見て探す。崖の場合は露出している物を探し、また岩中の場合は雨上がりノジュールのあるところは周りと色合いが違うので掘り出す。	アンモナイト探しの当初はとるのが楽しくて、割ってみて入っていればなんでも持ち帰った。なれてくると、俗にいう「虫食い」状態のものは割らずに持ち帰る。また産地にもより小平町、羽幌町は持ち帰る。幌加内町、中川町等の場合は一部割りアンモが確認出来たら持ち帰る。	異常巻、小型の化石は自宅に展示している。他は物置に箱詰めに保管している。	病気になる前最後に行った●●川の崖から採取した「ジノボイセラス、ゴードリセラス」のペアのアンモナイトです。	病気で化石採取には行けませんが、化石会に入会した皆さんの仲間がで、ノジュールを自宅に届けてくれる人、宅急便でノジュールを送ってくれる人など、皆さんの会員に支えられクリーニングを楽しんでいます。現在も各種展示会、化石会行事等に参加しており、これからも体の続く限り参加するつもりです。	
自分がいつも入る沢→どの辺にどのような化石が出るか解っているため、ノジュールはなるべく見つけたそのまま持ち帰ってからきれいに洗って、何が入っているか確認し、クリーニングする	小さな化石でも珍しい化石、異常巻完全体でなくても一歩でも残っている石、見栄えがする化石（ノジュール）	自分の部屋等→化石専用部屋を建てたいです	・メヌイテス、ジャポニクス（完全体）4個 ・ハイハントセラス・オシマイ・リュウシアヌス？ ・ハイハントセラス・オリエンターレ ・ポリプチ ・ソーウンナイテス・グレーゾ いずれも珍しいアンモ。博物館で展示されているものと同程度クラス	幌加内地区のアンモの採取	
川を歩いていて人があまり見えないような河原に草の生えているところ（草陰）とか川の中の流れが少し強い付近に気を使って探す	小さくても大きくても少しくらい摩耗していても保存が良ければ持ってきます	物置	・サブプリオノサイクルス：昭和45年に●●川の砂防工事の時に採集 ・アイソセラス、カムイバウシコスタータス：3年前に●●のこれも砂防ダム工事の時採集 ・鱗木：穂別の●●で採集。調べてみたが種がわからず、初めて見るので ・リヌバルス・ジャポニクス（ハコエビ）小平町●● 自分は初めて小平で採集	高齢のために目標はありません	
入所（処）した場所の、化石の入っているノジュールの特徴を早く見つけ出すことでしょいか	ノジュールらしきものの中に、化石の影を見つけたものは持って帰った方がよいと思います。あくまで運べるものですが。	自宅の車庫の片隅に、棚等を利用して保管しています。			
露頭ではノジュールが見えなくても、ガケ表面の色の違い、川、沢では蛇行の変化による深み、えぐり取られた箇所なるべく人が入らないような箇所、盲点を探す	化石の種類、大きさで残してくる場合もある（次の人達のため）。自分としては満たしているが、体験教室用として持ってくる場合も有る。希少種と特に古い方（アルビアンセノマニアン）は、持って来る様にしている	家の中に置くべきものと、外、物置、車庫に置くべきものを判断して。特に専用の部屋がないため。	ハイパーブシアタモン、オキシトロビドセラス 白亜紀前期1億年以上前のアンモナイトで保存良好、特にオキシトロビドセラスは希少なので。ホルキア・インゲンス…リーサイ多産地区にリーサイ狙いで出掛けるも、予想外で保存良く、今まで見たことのない大きさ。ニポニテス・ミラビリス…非常に小さく保存良好でクリーニングできた事。	私の化石コレクターとして、全然目標には届いていないが、十分に楽しく、そして多くの仲間と出会いに感謝。年齢を考え、子供たちに夢を与え、興味を持ってくれる子どもたちとのつながりを沢山作っていきたい！高齢化の会員も多くなってきているが、会の発展に寄与できれば！	北海道開拓の歴史の中でアンモナイトが脚光を浴び、古生物学に貢献した事。現世の異常気象や温暖化、アンモナイトの時代にも海水温の変化、無酸素化等環境の減少等学ぶことは多いと思う。北海道開拓記念館時代から会の発展に力を注いでいただいたことに感謝し、これからもよろしく指導のほどお願いいたします。
ノジュールの形、虫くいのあるなどをよく見る		物置など	ユウバキデスラス：初めて息子、娘と桂沢に行った時ガケから見つけた	元気な内はずっと続けたいです	
よく見る	持てる重さ	レンタルガレージ	ブラビトセラス：解らない事が沢山あるから	ニッポニテスを探す事	いつまでも北海道と付きあっていたい

もがいる場合はある程度大きくなった頃と推測される。化石に興味をもつきっかけはそれぞれだが、6番のようにアンモナイトの置物が知人宅にあったり、7・8番のようにアンモナイトが身近で見つかることが影響している例、10番と12番のように三笠高校での発掘調査に関わったことが影響している例などは、生活圏の自然環境が大きくかかわっており、その土地・時代ならではのきっかけといえる。また、入会してからの活動スタイルも、一時的に休会したり（10番）、最初は名ばかりの会員（12番）だったり、体調の都合で採集に出かけられないのでクリーニング作業が中心となる会員（8番）もあり、それぞれの状況に合わせて変化している。

化石に、あるいは化石探して感じる魅力は、化石そのものを見つけだすことと、クリーニングによって全体を見出した時の2つに大別できる。いずれにせよ、これまで見えなかったものが自分の力によって顕わになる点が、大きな魅力と考えられる。そのほか、1番のように川の中を歩くことでストレス解消になる、という回答や、4番のように「スーチャーの美しさ」と外形の魅力を挙げた例もあった。

加入のきっかけの多くは知人、職場の同僚による勧誘などで、4・8番の山中で化石会会員と出会って入会、という例は化石会ならではのいったところであろう。9番のように親が入会しており、自分も入会したという例もあった。10番の一時的に休会したという例は、炭鉱の閉山が地域経済に与えた影響をうかがわせる。加入することによって起こった変化としては、知識が増えたり、クリーニング技術が向上したり、展示の機会が得られたことが挙げられた。

化石を探す時期について、8・10・11・12番などの回答から雪解けが重要なタイミングであることがわかる。可能な限り探しに行きつつ、水位が高い時期を避けたり（1番）、クマの出没を気にする（3番）など、安全に配慮していることもうかがえる。回答にやばらつきがあるのは、それぞれ探しに行く場所が異なるからである。冬に探しに行く例（4番）があるが、これは回答者が対象とする化石が出る地層が海にあり、かつ海岸部が浅いためにアクセスしやすく、また結氷しないという条件を満たす地域であるためである。

化石を探す場所は、欲しい化石が出る地層を調べたり、人から聞いて選定している場合が多い。また「人のいないところ」というように、まだ誰も化石を見つけていないような場所という点も重要視されている。化石探しのコツについては、とにかくよく見る／丁寧に探すことが挙げられた。興味深いのは「化石と呼ばれる」という感覚（1番）である。何度も出かけ、探すことによって化石がありそうな場所を感覚的につかめるようになるとい

う認識は、聞き取ったところ他の会員にも理解されるところであり、共通した感覚のようである。

持ち帰る化石の基準は、自分一人で運べることや、初めて見つけた種類のもの、保存状態のいいものなどが挙げられた。なかにはクリーニング教室用やプレゼント用にと小さなものを持ち帰っている例（7・12番）もあった。

保管場所は、家の中や、納屋、小屋を用意した例などがあった。

#### (4)-2-5) その他の調査

##### ①化石会会員への聞き取り調査

アンケート調査の結果を受け、化石会の会員3名（7・8・12番）への聞き取り調査を実施した。この3名に依頼した理由は、聞き取り調査を承諾してくれたことのほか、次のとおりである。7番は子どもころの体験や化石探しの際に化石以外の点にも注目しているところが興味深かったこと、8番は化石採集には行けなくなっても、会員間のつながりで現在も化石と関わり続けることができている点が興味深かったこと、12番は三笠高校在学中の発掘調査の状況について詳細をうかがいたかったことがそれぞれへ依頼するきっかけである。3名の自宅にうかがい、アンケートの回答を基に、人生のどのようなタイミングで化石（アンモナイト）との関わりがあったか、どのように採集やクリーニングなどを続けた（かかわり続けた）かの詳細を明らかにするため、個人史を作る要領で聞き取りを進めた。

7番と8番の2人は、石炭産業が盛んかつ化石が産出しやすい、夕張市の出身である。また12番は東京都で生まれ育ったが、夕張市同様石炭産業が盛んかつ化石の産出する三笠市に移り住み、三笠高校へと進学した。3人とも若いころにアンモナイトに興味をもつきっかけがあり、就職後ある程度年数がたった段階で化石会に入るなどして化石（アンモナイト）と関わる機会を持つようになった、という流れがあることを確認した。

また、化石会への関わり方も年齢と共に変化し、行事にただ参加するのではなく、子どもを対象としたワークショップ用の材料を集めたり、知り合いを通じて展示する機会の確保など会の維持や裾野を広げるための活動もするようになったことが分かった。

アンケートでは、職場の人に誘われて入会したという例が少なくなかったが、8番の会員によれば、化石に興味がある人たちの集まりのため、職業と関係なく人と関わることが楽しいという話が出た。化石会が、職場で個人的なつながりを生む場合もあれば、むしろ一個人として職場とはまったく異なる付き合いをもちたいという願望をかなえる場でもあることがうかがえる。

化石会全体の活動については表5、一年間の活動につ

いては図12のとおりだが、それ以外に化石採集の帰りに、他の会員の家を訪ねて挨拶をしたり、採れた化石を見せたりと小規模かつ個人間の交流もある。

これらの聞き取りのほか、クリーニング道具の説明を受けたり、化石の保管やクリーニングを行うスペースの写真撮影を行った。アンケートで質問した化石の置き場の確保も重要な問題だが、クリーニング作業では比較的大きい音がすることや粉塵が出ることもあって、作業場の確保が難しいという話が出た。クリーニングで化石から剥がした石については、家庭菜園を区切るために使用したり、クリーニング前のノジュールを庭先に置いておくなど、アンケートで分からなかった部分について聞き取りを行った。この間、炭鉱があった地域での生業や結婚の在り様、檀那寺の総代を務めたり寺に飾るための花を家庭菜園で育てるなど、一人の化石会の会員の暮らしのなかに複数の、異なるレベルでの付き合いが存在することを改めて確認した。

## ②学芸員の活動に関する調査

学芸員同士であっても、分野が異なると、調査地の選定方法や一年間の調査スケジュール、調査方法、資料整理の方法なども異なるため、研究活動の詳細がわからな

い場合も少なくない。まして展示を見に来る観覧者の多くにその活動は知られていないことが推測された。そこで、業務の一部であり本展示会の準備にもなる地学分野担当学芸員の資料整理の観察と、野外での調査（化石採集）に帯同した。

今回整理された資料は、化石会あるいは会員から過去に寄贈されたアンモナイト化石である。整理された資料の詳細は、本紀要で報告する久保見ほか（2023）を参照されたい。当館職員の作業のほか、アンモナイトの研究を専門とする三笠市立博物館の職員に作業を依頼することも、学芸員個人の専門は細分化されていることを伝える一例として作業風景を観察し、工程を圓谷に確認した。

化石採集は、化石会の会員3名と圓谷・久保見両氏の調査に帯同した（写真18・19）。どのような道具を使うのか、どういった服装で出かけるのか、基本的かつ初心者が知らない情報であるため、会員や当館職員に質問し、可能な限り展示したいと考え、この時点で展示ケースに入れられる大きさの物を選定した。調査中には、化石の探し方の違いや、化石を含む地層を観察・記録する久保見学芸員の調査の様子を観察、撮影、適宜聞き取り調査を行った。

表5 化石会全体の活動

月	活動名	内容・その他
1月	新年会	1月末から2月のどこかで、日中に開催。各会員が持参した化石を見て、翌年の化石会の年賀状の顔になる1点を選ぶ。 そのほか、食品や家庭用品のオークションを楽しむ。
2月		
3月		
4月	総会	前年度の決算、新年度の事業を決定。
5月		
6月	探石会	皆で山に入り、化石を探す。
7月		
8月		
9月	野遊会	午前中は皆で化石採集、午後はジンギスカンを食べて交流。
10月	三笠市民文化祭化石展示	
11月		
12月		

※年4回、機関紙『ダメシテス』を発行



写真18 化石採集①



写真19 化石採集②

(4)-3 パネル作成・展示作業

パネルは、調査で得たデータを、主に会話形式に構成した。1つの吹き出しがおおよそ150字程度になるように努めたが、「学芸員のお仕事 その2」のパネルは、本人にそれぞれ書いてもらったため、大幅に文字数が増えた。この点については、学芸員の特性が伝わる例と捉え、あえて修正しなかった。

展示資料は、展示資料リスト（156～157頁）の38点であり、3台のケースを使用することになっていたため、そこに合わせて会話の内容も展示ケース内の資料を説明するものとし、キャプションは資料名のみにしてケース内のスペースを確保した。



写真20 「当館が連携する外部機関の取り組みの紹介」の展示

(5) 当館が連携する外部機関の取り組みの紹介

本展の最後に、化石を対象に展示や教育普及、学術的な活動などを行う、2つの外部機関の紹介コーナーを設けた（写真20）。

1つ目は、「北海道恐竜・化石ネットワーク研究会（以下、本研究会）」である。ここでは、本研究会の活動の概要、製作した動画やオンライン展示などをまとめたパネルを展示した。また、本展の観覧後に各地にある構成施設を訪れてもらうことを目指し、各施設のパンフレットなどを会場で配布した（写真21）。本研究会は、北海道総合政策部地域創生局地域政策課が事務局を務めており、道内で発掘される恐竜をはじめとした様々な古代生物の化石を資源として活用した地域づくりに向け、地域間が連携した取り組みを進めることを目的として、平成30（2018）年1月に設立された。同年8月には、取り組みの基本的な考え方である「恐竜・化石を活かした地域づくりの方向性」を取りまとめ、これに基づき、各市町村・博物館などと連携し、恐竜・化石に関する情報発信の一元化や、イベントの実施などに取り組んでいる。令和4（2022）年度は、当館を含む13施設（三笠市立博物館（三笠市）、むかわ町穂別博物館（むかわ町）、中川町エコミュージアムセンター（中川町）、小平町文化交流センター（小平町）、足寄動物化石博物館（足寄町）沼田町化石体験館（沼田町）、札幌市博物館活動センター（札幌市）、黒松内町ブナセンター（黒松内町）、八雲町郷土資料館（八雲町）、オホーツクミュージアムえさし（枝幸町）、浦幌町立博物館（浦幌町）、別海町郷土資料館（別海町））で構成され、北海道大学総合博物館副館長・教授の小林快次氏がアドバイザーとなっている。



写真21 北海道恐竜・化石ネットワーク研究会の展示

2つ目は、古生物学の発展・普及を目的とする学術団体「日本古生物学会（以下、本学会）」である。ここでは、本学会の活動と令和元（2019）年に製作した「異常巻きアンモナイト3D化石図鑑」の概要をまとめたパネルを展示した。また、製作された3D図鑑のデータは、



写真22 日本古生物学会「異常巻きアンモナイト3D化石図鑑」の展示

無料で公開されていることから、観覧者自身のスマートフォンなどで閲覧してもらえるようQRコードを作成し、当館から素材として提供した実物化石4点も展示した(写真22)。「異常巻きアンモナイト3D化石図鑑」は、本学会が多くの方に生物の持つ形の不思議さを実感してもらうことを目的として、クラウドファンディングで資金を集め実施したものである。対象となったアンモナイト化石は、本学会のシンボルマークであるニッポニテス・ミラビリス *Nipponites mirabilis* をはじめとした異常巻きアンモナイトで、令和5(2023)3月では27点が公開されている(日本古生物学会HP)。

## 5 観覧者を対象としたアンケート調査

### (1) 調査方法

本展の会期中、観覧者全員を対象(回答は任意)に、①紙媒体(展示室の出口付近に記入用の机、アンケート用紙と筆記用具を用意して、その場で回答してもらう方法)、②電子媒体(展示室の出口付近で掲示、または紙媒体で配布したQRコードを自身のスマートフォンなどの端末で読み込み、専用サイト(北海道電子自治体共同システム(簡易申請)を利用)にアクセスして、回答してもらう方法)、の2つの方法で調査を行った。質問項

表紙日 2022 年 月 日

北海道博物館 第19回企画テーマ展・北海道化石会発足50周年記念展  
「アンモナイトと生きる-50年の歩みとこれから-」

今後の展示会、サービスの参考にさせていただきたくため、よろしければアンケートにご協力ください。

1. ご年齢は? ①10代未満 ②10代 ③20代 ④30代 ⑤40代  
⑥50代 ⑦60~64歳 ⑧65~69歳 ⑨70代 ⑩80代以上

2. 性別は? ( )

3. お住まいは?  
①札幌市内( 区 ) ②江別市 ③北広島市 ④恵庭市 ⑤千歳市 ⑥石狩市  
⑦北海道内( ) ⑧道外( ) ⑨国外( )

4. どなたといらっしゃいましたか?  
①ひとり ②友人・仲間 ③カップル ④家族・パートナー ⑤子連れ ⑥学校で ⑦その他 ( )

5. 何人でいらっしゃいましたか? ※回答者をふくめた人数をお答えください  
( )人

6. 本展示会を何でお知りになりましたか? (複数回答可)  
①新聞 ②雑誌 ③テレビ ④ラジオ ⑤ポスター ⑥ちらし (⑤・⑥と答えただけは下へ)

ポスター・ちらしはどこでご覧になりましたか? (あてはまるものはいくつでも○)  
■図書館 b 区民センター c 市・区役所 d 他の博物館や美術館 e 学校 f 当館 g その他 ( )

⑦口コミ ⑧SNS ⑨当館 Twitter ⑩当館ウェブサイト ⑪当館イベント ⑫屋外看板  
⑬今日来館して初めて知った ⑭その他 ( )

7. 本展示会をご覧になった感想を教えてください  
①たいへん満足 ②満足 ③不満 ④たいへん不満  
具体的な感想を教えてください  
(欄が足りない場合は、裏面をご使用ください)

今後ご覧になりたい展示会があれば、テーマや内容を教えてください  
( )

8. 北海道博物館の 総合展示 はご覧になりましたか? ご感想をお教えてください。  
①たいへん満足 ②満足 ③不満 ④たいへん不満 ⑤見ていない  
具体的な感想などがあれば、お書きください  
( )

9. 当館の感染症対策について、ご感想を教えてください。  
①とても安心 ②安心 ③不安 ④とても不安  
具体的な感想などあれば、お書きください  
( )

ご協力いただき、ありがとうございました。

図14 本展示会のアンケート用紙

目の選定、回答の集計方法は、当館の企画展示で毎回使用している調査手法に合わせて行った(図14)。

### (2) 調査結果・考察

本展の観覧者15,354人から、296件(回答率1.9%)の回答を得た。回答方法の内訳は、紙媒体90.9%(269件)、電子媒体9.1%(27件)である。以下に、質問1~7の回答結果と、若干の考察を記述する。

#### ■質問1. ご年齢は?

10代未満が19.0%(58件)、10代が17.3%(53件)、40代が15.7%(48件)と上位を占めながら、幅広い年齢層からの回答を得た(図15)。

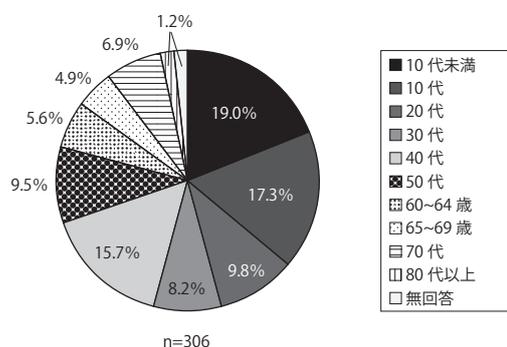


図15 アンケート結果 年齢(複数回答有)

#### ■質問2. 性別は?

男性が55.1%(163件)とやや多く、女性が36.1%(107件)と回答を得た(図16)。

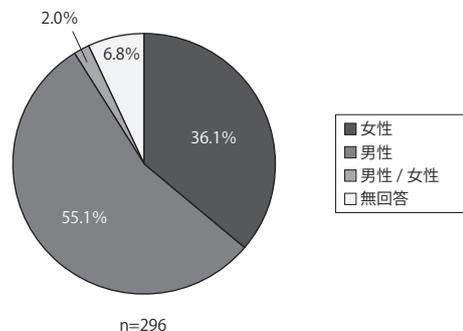


図16 アンケート結果 性別

#### ■質問3. お住まいは?

札幌市内が59.1%(175件)、当館の近隣市町村(江別市、北広島市、千歳市、恵庭市、石狩市)は17.6%(52件)となり、約8割は当館の近隣と回答を得た(図17)。また、その他道内は10.1%(30件)、その他道外は9.5%(28件)と、遠方からの観覧者がいたことも示された。

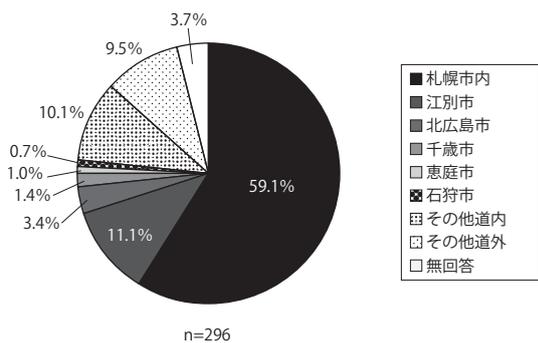


図17 アンケート結果 居住地

■質問4. どなたといらっしゃいましたか？

家族・パートナーが45.5%（138件）と約半数を占め、ひとりが21.8%（66件）、友人・仲間が10.6%（32件）と回答を得た（図18）。

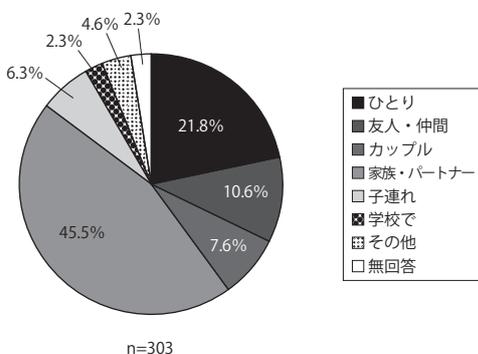


図18 アンケート結果 同伴者（複数回答有）

■質問5. 何人でいらっしゃいましたか？

2人が33.1%（98件）と最も多く、1人が22.6%（67件）、3人が19.3%（57件）、4人が14.2%（42件）と回答を得た（図19）。“質問1. ご年齢は？”では、10代未満、10代、40代が上位を占めていたこと、“質問4. どなたといらっしゃいましたか？”では、家族・パートナーが45.5%（138件）、また子連れが6.3%（19件）であったことから、本展の観覧者は、10代以下の子どもがいる家族の観覧が多かったことが明らかとなった。

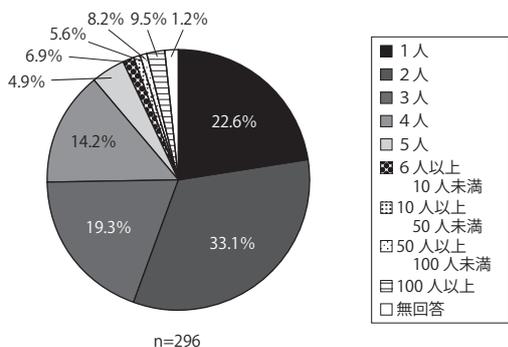


図19 アンケート結果 来館人数

■質問6. 本展示会を何でお知りになりましたか？（複数回答可）

ポスターが16.8%（56件）、新聞が16.2%（54件）、ちらしが12.0%（40件）、当館ウェブサイトが11.4%（38件）、来館して知ったが11.1%（37件）と回答を得た（図20）。また、“ポスター・ちらしはどこでご覧になりましたか？”では、109件の回答（複数回答有）があり、当館が18.3%（20件）、他の博物館や美術館が18.3%（20件）、図書館が15.6%（17件）と、上位を占める回答を得た（図21）。

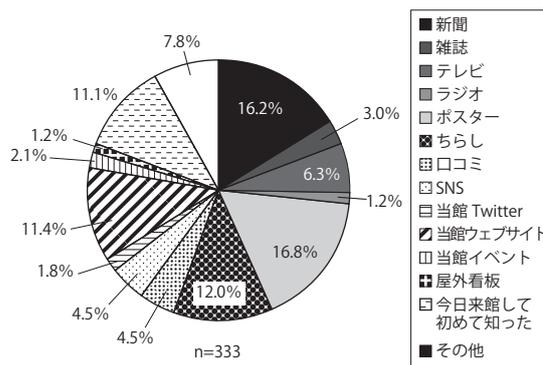


図20 アンケート結果 本展示会を知ったきっかけ（複数回答有）

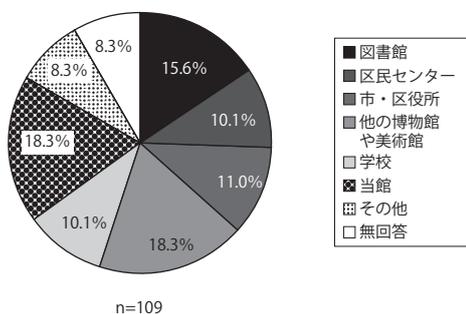


図21 アンケート結果 ポスター・ちらしはどこでご覧になりましたか（複数回答有）

■質問7. 本展示会をご覧になった感想を教えてください  
たいへん満足が56.0%（167件）、満足が34.6%（103件）と、比較的高い満足度を得られた（図22）。

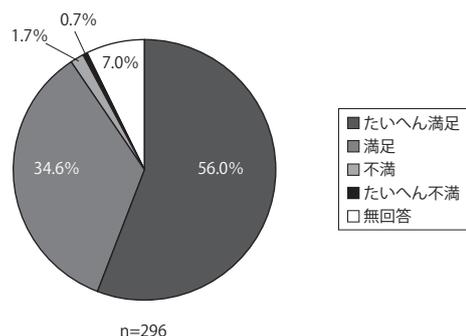


図22 アンケート結果 本展示会の感想

また、“具体的な感想を教えてください”では全体の73.0% (216件) の回答を得た。本展の「アンモナイトと関わる人」というテーマをはじめ、北海道の成り立ち、出品された化石の多様性や美しさ、展示方法への具体的な評価を多数得られた。また、化石会に対する好意的な感想も得られた。一方、アンモナイトの種類分け方や体の構造など古生物学・地質学的内容の充実、化石の周りの石を取り除くクリーニング作業の方法、触れる化石の出品など、展示内容への要望も散見された。以下に、これらに関する回答の抜粋を示す。

- ・モノと人の関りというテーマをアンモナイトという切り口からみれたのがよかった (物のもつ物語) (評価: たいへん満足)
- ・一口にアンモナイトと言っても色々な種類があり、さまざまな人や経緯と関り、私たちの目の前にあるのだと感動しました。こういう化石を見ていると、やっぱり地球ってすごいんだなと思いました。(評価: たいへん満足)
- ・展示されたアンモナイトが素晴らしいのはもちろんですが、会員のみなさんのアンモナイトとの出会いや発見までの苦労が伝わり、魅力的な展示になっていました。学芸員の方からの質問形式のパネルも大変読みやすかったです (評価: たいへん満足)
- ・アンモナイトは好きでよく見に行きますが、「愛好する人」に焦点をあてたものは意外で、とても興味深く楽しく見られました。素人なので学術的な知識より、親しみを持って見ることができました (評価: 満足)
- ・北海道が陸地とつながっていたことは知っていましたが、2つに分れつつしていたことは知りませんでした。さらに、アンモナイトの様々な姿がみれとてもよかったです (評価: 満足)
- ・化石会に入りたい (8才長男) (評価: 満足)
- ・アンモナイトの種類の見分け方のポイントなど説明ポスターなどがあると嬉しい。(評価: 満足)
- ・展示が単調、クリーニング過程やクリーニングの道具をみたかった。アンモナイトの体の構造がわかる標本も見たかった。(評価: たいへん満足)
- ・アンモナイトの名前は、誰がどのような意味で付けたのか又誰がつけるのか、説明があればよい (評価: 満足・不満)
- ・満足: 化石にかかわる人の心意気を教えられた。  
不満: さわれる化石があればいいのに (評価: 満足・不満)

## 6 おわりに

本展は、当館と化石会の50年にわたる連携・協働の

歴史と化石会発足50周年を記念して、「アンモナイトに関わる人」というテーマで開催した。このテーマがより多くの観覧者に伝わるよう、化石会会員の自慢・思い出のアンモナイトをはじめとする152点の化石とエピソードを展示し、当館の学芸員はそれぞれの専門性を活かして展示を構成した。会期中に実施したアンケート調査の結果、たいへん満足・満足を約9割と、比較的高い評価を得ることができ、本展の目的であった、化石と化石会、当館をより身近に感じてもらえるようにすることは、概ね達成できたと感じている。一方、アンモナイトの地質学・古生物学的内容の充実や、触れる化石の出品など、展示内容への要望も散見された。今後は、これらの成果と課題を糧とし、化石会をはじめ、化石を対象に活動を行う外部機関との連携・協働を一層深めながら、「アンモナイトをはじめとする化石の魅力をたくさんの方々に伝えたい」という志を持ち、展示や教育普及、研究活動を展開していきたい。

## 謝辞

本展の開催にあたり、北海道化石会会長の藤原寛一氏、事務局長の小川益弘氏をはじめ、会員各位には多大なるご尽力をいただいた。また、北海道大学附属図書館、北海道恐竜・化石ネットワーク研究会の事務局や構成団体、日本古生物学会、羽幌古生物研究会の森伸一氏には、展示資料のデータなどをご提供いただいた。以上の方々に、記して厚く御礼を申し上げる。

## 引用文献

- 在田一則・石井正之・岡 孝雄・金 光男・地徳 力・古沢 仁・松田義章 2008. ライマンと北海道の地質:北からの日本地質学の夜明け. 北海道大学総合博物館第57回企画展示「ライマンと北海道の地質-北からの日本地質学の夜明け-」:1-71.
- 北海道博物館 2022. 北海道博物館要覧 第7号(要覧2021年度)-第2期中期目標・計画 実績報告書2-:1-176.
- Kiminami, K., 1983, Sedimentary History of the Late Cretaceous-Paleocene Nemuro Group, Hokkaido, Japan: A forearc basin of the Paleo-Kuril arc-trench system. *Journal of the Geological Society of Japan* 89: 607-624.
- 君波和雄 1989. 北海道周辺のテクトニクスに関する新提案. 月刊地球 11: 309-315.
- Kimura, G., 1996, Collision orogeny at arc-arc junctions in the Japanese Islands. *Island Arc* 5: 262-275.
- 久保見 幸・唐沢與希・相場大佑・圓谷昂史 2023. 北海道博物館所蔵の地学資料-白亜紀アンモナイト化石-. 北海道博物館研究紀要 8: 57-77.
- Lyman, B. S., Munroe, H. S., Yamaguchi, T., Akiyama Y., Inagaki, T., Kuwada, T., Misawa, S., Takahashi, J., Kada, T., Ban, I., Saito, T., Shimada, J., Yamagiwa, E., Mayeda, S. and Nishiyama, S., 1876, A Geological

- Sketch Map of the Island of Yesso, Japan. *Geological Survey of Hokkaido, Kaitakushi*.
- Matsumoto [=Matumoto], T., 1942, Fundamentals in the Cretaceous stratigraphy of Japan, Part 1. *Memoirs of the Faculty of Science, Kyushu Imperial University, Series D, Geology* 1: 129–280.
- Matsumoto [=Matumoto], T., 1943, Fundamentals in the Cretaceous stratigraphy of Japan, Parts 2 & 3. *Memoirs of the Faculty of Science, Kyushu Imperial University, Series D, Geology* 2: 97–237.
- 三笠市史編さん委員会編 1993. 新三笠市史 通史編. 三笠市成瀬 元・前田晴良・重田康成 2000. 北海道東部根室層群から新たに産出した後期白亜紀軟体動物化石とK/T境界の層準について. *地質学雑誌* 106: 161–164.
- 日本古生物学会ホームページ 異常巻きアンモナイト3D化石図鑑. (<https://www.palaeo-soc-japan.jp/3d-ammonoids/>) (2023年2月15日閲覧)
- 日本地質学会編 2010. 日本地方地質誌 北海道地方. 朝倉書店.
- 野田芳和・後藤道治 2004. 日本列島の古地理復元と恐竜博物館における展示. *福井県立恐竜博物館紀要* 3: 47–63.
- Takahashi, Y., Mikoshihara, M., Shimura, T., Nagata, M., Iwano, H., Danhara, T., and Hirata, T., 2021, U–Pb ages of zircons from metamorphic rocks in the upper sequence of the Hidaka Metamorphic Belt, Hokkaido, Japan: Identification of two metamorphic events and implications for regional tectonics. *Island Arc* 30: e12393.
- Takashima, R., Kawabe, F., Nishi, H., Moriya, K., Wani, R. and Ando, H., 2004, Geology and stratigraphy of forearc basin sediments in Hokkaido, Japan: Cretaceous environmental events on the north-west Pacific margin. *Cretaceous Research* 25: 365–390.
- Toshimitsu, S. and Hirano H., 2000, Database of the Cretaceous ammonoids in Japan –stratigraphic distribution and bibliography–. *Bull. Geol. Sur. Japan*. 51: 559–613.
- Usuki, T., Kaiden, H., Misawa, K., and Shiraishi, K., 2006, Sensitive high-resolution ion microprobe U–Pb ages of the latest Oligocene–early Miocene rift-related Hidaka high temperature metamorphism in Hokkaido, northern Japan. *Island Arc* 15: 503–516.



1. Tracheophytes [2-1-1]



2. *Linuparus japonicus* [2-1-2]



3. *Prionocyclus aberrans (cobbani)* [2-1-3]



4. *Ainoceras paucicostatum*, *Ainoceras kamuy* [2-1-4]



5. *Ainoceras kamuy* [2-1-5]



6. *Anagaudryceras limatum* [2-1-6]



7. *Damesites sugata*, *Polyptychoceras yubarensis* [2-1-7]



8. *Tongoboryceras* sp. [2-1-8]



1. *Hauericeras angustum* [2-1-9(1)]



2. *Phyllopachyceras ezoense* [2-1-9(2)]



3. *Tetragonites popetensis* [2-1-10(1)]



4. *Tetragonites glabrus* [2-1-10(2)]



5. *Polyptychoceras* sp. [2-1-10(3)]



6. *Ainoceras paucicostatum* [2-2-1]



7. *Vascoceras* sp. [2-2-2]



8. *Yokoyamaoceras ishikawai* [2-2-3]

図版2. 展示資料 [ ]は展示資料リストの番号に対応



1. *Anagaudryceras* sp. [2-2-4]



2. *Eutrephoceras* sp. [2-2-5]



3. 骨化石 [2-2-6]



4. アンモナイトを入れた額 [2-2-7]



5. 化石の入ったノジュール [2-2-8]



6. いろいろなアンモナイトを入れた鉢 [2-2-9]



7. *Menuites* sp. [2-2-10]



8. *Gaudryceras* sp. [2-3-1]



1. *Gaudryceras denseplicatum* [2-3-2]



2. *Anagaudryceras limatum*, *Damesites damesi* [2-3-3]



3. *Neophylloceras* sp. [2-3-4]



4. *Neomphaloceras* sp. [2-3-5]



5. *Muramotoceras* sp. [2-3-6]



6. *Eubostrychoceras* sp. [2-3-7]



7. *Kossmaticeras* sp. [2-3-8]



8. *Subprionocyclus minimus* [2-3-9]

図版4. 展示資料 [ ]は展示資料リストの番号に対応



1. *Pseudobarroisiceras* sp. [2-3-10]



2. *Desmoceras* sp. [2-3-11]



3. *Pachydesmoceras kossmati* [2-3-12]



4. *Pachydesmoceras* sp. [2-3-13]



5. *Gaudryceras* sp. [2-3-14]



6. *Yokoyamaoceras ishikawai* [2-3-15]



7. 骨化石 [2-1-16]



8. 骨化石 [2-3-17]



1. *Sharpeiceras* sp. [2-4-1]



2. *Anagaudryceras howarthi* [2-4-2]



3. *Calycocheras* sp. [2-4-3]



4. *Menuites* sp. [2-4-4]



5. *Canadoceras* sp. [2-4-5]



6. *Gaudryceras yokoi* [2-4-6]



7. *Canadoceras multicoatum* [2-5-1]



8. *Canadoceras* sp. [2-5-2]

図版6. 展示資料 [ ]は展示資料リストの番号に対応



1. *Gaudryceras crassicostatum* [2-5-3]



2. *Pachydiscus soyaensis* [2-5-4]



3. *Schlueteria kawadai* [2-5-5]



4. Nautilidae [2-5-6]



5. *Desmoceras* sp., *Diplomoceras* sp. [2-5-7]



6. *Canadoceras* sp. [2-5-8]



7. *Anagaudryceras* sp. [2-5-9]



8. *Desmoceras ezoanum* [2-5-10]



1. *Anagaudryceras limatum* [2-5-11]



2. *Mesopuzosia* sp. [2-5-12]



3. *Tetragonites glabrus* [2-5-13]



4. *Tetragonites glabrus* [2-5-14]



5. *Heteroptychoceras obatai* [2-5-15]



6. *Hyperpuzosia tamon* [2-6-1]



7. *Oxytropidoceras* sp. [2-6-2]



8. *Parajaubertella kawakitana* [2-6-3]



1. *Mantelliceras dixoni* [2-6-4]



2. *Mantelliceras lymense* [2-6-5]



3. *Puzosia* sp. [2-6-6]



4. *Calyoceras orientale* [2-6-7]



5. *Yubariceras yubarensense* [2-6-8]



6. *Muramotoceras yezoense* [2-6-9]



7. *Inoceramus* sp., *Eubostriochoceras japonicum* [2-6-10]



8. *Nipponites mirabilis* [2-6-11]

図版9. 展示資料 [ ]は展示資料リストの番号に対応



1. *Nipponites occidentalis* [2-6-12]



2. *Nipponites sachalinensis* [2-6-13]



3. *Subprionocyclus minimus* [2-6-14]



4. *Hourcquia ingens* [2-6-15]



5. *Gaudryceras mite* [2-6-16]



6. *Pachydesmoceras mihoense* [2-6-17]



7. *Forresteria yezoensis* [2-6-18]



8. *Anagaudryceras limatum* [2-6-19]

図版10. 展示資料 [ ]は展示資料リストの番号に対応



1. *Ainoceras kamuy*, *Ainoceras paucicostatum* [2-6-20]



2. *Eupachydiscus haradai* [2-7-1]



3. *Scaphites* sp. [2-7-2]



4. *Gaudryceras hamanakense* [2-7-3]



5. Echinoidea [2-7-4]



6. *Diplomoceras* sp. [2-7-5]



7. Elasmobranchii [2-7-6]



8. *Eupachydiscus* sp. [2-8-1]



1. *Eupachydiscus* sp. [2-8-2]



2. *Neopzosia* sp. [2-8-3]



3. *Tetragonites glabrus* [2-8-4]



4. *Polyptychoceras obstructum* [2-8-5]



5. *Polyptychoceras yubarense* [2-8-6]



6. *Polyptychoceras pseudogaultinum* [2-8-7]



7. *Gaudryceras* sp. [2-8-8]



8. *Texanites kawasakii* [2-8-9]

図版12. 展示資料 [ ]は展示資料リストの番号に対応



1. *Neopuzosia* sp., *Gaudryceras* sp. [2-8-10]



2. *Mesopuzosia yubarensis* [2-8-11]



3. *Menuites japonicus* [2-8-12]



4. *Collignoniceratidae* [2-8-13]



5. *Mesopuzosia pacifica* [2-8-14]



6. *Romaniceras* sp. [2-8-15]



7. *Gaudryceras hamanakense* [2-8-16]



8. *Nipponites mirabilis* [2-9-1]



1. *Ryuella ryu*, *Eubostriyoceras* sp. [2-9-2]



2. *Muramotoceras* sp. [2-9-3]



3. *Scaphites* sp., *Scalarites* sp., *Yezoites* sp. [2-9-4]



4. *Polyptychoceras* sp., *Menuites* sp.,  
*Phyllopachyceras* sp., *Neophylloceras* sp. [2-9-5]



5. *Pseudoxybeloceras* sp. [2-9-6]



6. *Menuites japonicus* [2-9-7]



7. *Anagaudryceras limatum* [2-9-8]



8. *Romaniceras yezoense* [2-9-9]



1. *Neomphaloceras costatum* [2-9-10]



2. *Neomphaloceras pseudomphalum* [2-9-11]



3. *Jimboiceras planulatiforme*,  
*Gaudryceras denseplicatum* [2-9-12]



4. *Damesites damesi*, *Yokoyamaoceras ishikawai*  
[2-9-13]



5. *Tetragonites glabrus* [2-9-14]



6. *Canadoceras kossmati* [2-9-15]



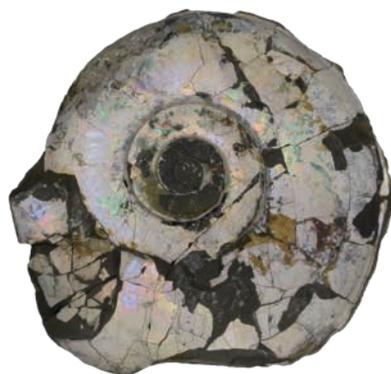
7. *Desmophyllites diphylloides* [2-9-16]



8. *Sharpeiceras* sp. [2-10-1]



1. *Saghalinites teshioensis*, *Metaplacenticeras* sp. [2-10-2]



2. *Hauericeras angustum* [2-11-1]



3. Nautilidae [2-11-2]



4. *Eupachydiscus* sp. [2-11-3]



5. *Menuites japonicus* [2-11-4]



6. *Subptychoceras yubarense* [2-11-5]



7. *Damesites damesi* [2-11-6]



8. *Tetragonites glabrus* [2-12-1]



1. *Damesites sugata* [2-12-2]



2. *Anagaudryceras limatum* [2-12-3]



3. *Calycocheras* sp. [2-13-1]



4. *Calycocheras* sp. [2-13-2]



5. *Mantelliceras* sp. [2-13-3]



6. *Cunningtoniceras takahashii* [2-13-4]



7. *Mikasaites orbicularis* [2-13-5]



8. *Hypoturritites komotai* [2-13-6]



1. *Eogunmarites* sp. [2-13-7]



2. *Austiniceras* sp. [2-13-8]



3. *Turrilites costatus* [2-13-9]



4. *Nipponites mirabilis*, *Mesopuzosia pacifica* [2-13-10]



5. *Eubostrychoceras japonicum*, *Scalarites* sp. [2-13-11]



6. *Eupachydiscus* sp. [2-13-12]



7. Nautilidae [2-13-13]



8. *Scalarites* sp. [2-13-14]



1. *Gaudryceras intermedium* [2-13-15]



2. *Romaniceras* sp. [2-13-16]



3. *Hyphantceras* sp. [2-13-17]



4. *Peroniceras* sp. [2-13-18]



5. *Forresteria* sp. [2-13-19]



6. *Nipponites mirabilis* [2-13-20]



7. *Tetragonites glabrus*, *Yezoites* sp. [2-20-1]



8. *Anagaudryceras limatum* [2-20-2]



1. *Anagaudryceras limatum* [2-20-3]



2. *Tetragonites glabrus* [2-20-4]



3. *Inoceramus* sp. [2-20-5]

凡例

○列「サイズ」

・Aとは、国際標準規格ISOで定められたA列寸法用の紙サイズを示す

○列「時代」

・UC：Upper Cretaceous 後期白亜紀（約1億～6,600万年前）

・Al：Albian 前期白亜紀 アルビアン（約1億1,300万～1億500万年前）

・Cen：Cenomanian 後期白亜紀 セノマニアン（約1億500万～9,390万年前）

・Tu：Turonian 後期白亜紀 チューロニアン（約9,390万～8,980万年前）

・Con：Coniacian 後期白亜紀 コニアシアン（約8,980万～8,630万年前）

・Sa：Santonian 後期白亜紀 サントニアン（約8,630万～8,360万年前）

・Cam：Campanian 後期白亜紀 カンパニアン（約8,360万～7,210万年前）

・Ma：Maastrichtian 後期白亜紀 マーストリヒチアン（約7,210万～6,600万年前）

・PE：Paleogene Eocene 古第三紀始新世（約5,600万～3,390万年前）

・NM：Neogene Miocene 新第三紀中新世（約2,303万～533万年前）

展示資料リスト

番号	資料・パネル名	種類	サイズ (縦×横×高)cm	時代	所蔵機関・所蔵者 (収蔵番号)	図版番号
0-0	タイトル	-	-	-	-	-
0-1-1	展示解説書配布コーナー	-	-	-	-	-
0-1-2	開催にあたって（北海道化石会）	パネル	A2	-	-	-
0-1-3	はじめに（北海道博物館）	パネル	A2	-	-	-
0-1-4	アンモナイトとは	パネル	A1	-	-	-
1-0	北海道とアンモナイト	-	-	-	-	-
1-1	北海道は日本一のアンモナイト産地！	パネル	A1	-	-	-
1-1-1	<i>Eupachydiscus haradai</i>	実物	14×12×9	Con-Cam	北海道博物館（113423）	-
1-1-2	<i>Eubostrioceras japonicum</i>	実物	16×11×9	Tu	北海道博物館（62031）	-
1-1-3	<i>Mesopusosia pacifica</i>	実物	12×9×4	Tu-Con	北海道博物館（113141）	-
1-2	北海道の地質学とアンモナイト研究の発展	パネル	A1	-	-	-
1-2-1	日本蝦夷地質要略之図	実物	40×52	-	北海道博物館（122182）	-
1-2-2	ライマンたちによる北海道全域の地質・炭田調査の年表	パネル	A1	-	-	-
1-2-3	現在の北海道の地質区分図	パネル	A1	-	-	-
1-2-4	地質図の凡例	パネル	A2	-	-	-
1-3	いざ、アンモナイトの世界へ！ 現在～第四紀（約2万年前）の北海道	パネル	A1	-	-	-
1-3-1	新第三紀中新世前期～中期（約2,000万～1,300万年前）の北海道	パネル	A1	-	-	-
1-3-2	かんらん岩	実物	最大10×7×5	NM (約1,300万年前)	北海道博物館 (-) *5点展示	-
1-3-3	古第三紀始新世（約5,000万～4,500万年前）の北海道	パネル	A1	-	-	-
1-3-4	石炭	実物	31×15×13	PE (約5,000万～4,500万年前)	北海道博物館（128309）	-
1-3-5	後期白亜紀カンパニアン～マーストリヒチアン（約8,000万～6,600万年前）の北海道	パネル	A1	-	-	-
1-3-6	現在から白亜紀までの北海道の古地理変遷	サイネージ	-	-	-	-
2-0	私の自慢・思い出のアンモナイトたち	-	-	-	-	-
2-0-1	北海道のアンモナイトの種類と色の秘密	パネル	A2	-	-	-
2-1	私の自慢・思い出のアンモナイト	パネル	A3	-	-	-
2-1-1	<i>Tracheophytes</i>	実物	12×18×9	Sa	富田 秋男 氏	図版1-1
2-1-2	<i>Linuparus japonicus</i>	実物	16×10×22	Con	富田 秋男 氏	図版1-2
2-1-3	<i>Prionocyclus aberrans (cobbani)</i>	実物	9×5×10	Tu	富田 秋男 氏	図版1-3
2-1-4	<i>Ainoceras paucicostatum</i> <i>Ainoceras kamuy</i>	実物	15×12×14	Cam	富田 秋男 氏	図版1-4
2-1-5	<i>Ainoceras kamuy</i>	実物	8×9×11	Cam	富田 秋男 氏	図版1-5
2-1-6	<i>Anagaudryceras limatum</i>	実物	30×15×20	Con	富田 秋男 氏	図版1-6
2-1-7	<i>Damesites sugata</i> <i>Polypthyoceras yubarensae</i>	実物	20×10×24	Sa	富田 秋男 氏	図版1-7
2-1-8	<i>Tongoboryceras</i> sp.	実物	16×10×18	Con	富田 秋男 氏	図版1-8
2-1-9	<i>Hauericeras angustum</i> <i>Phyllopachyceras ezoense</i>	実物	12×7×10	Sa	富田 秋男 氏	図版2-1,2
2-1-10	<i>Tetragonites popetensis</i> <i>Tetragonites glabrus</i> <i>Polypthyoceras</i> sp.	実物	16×16×15	Sa	富田 秋男 氏	図版2-3,4,5
2-2	私の自慢・思い出のアンモナイト	パネル	A3	-	-	-
2-2-1	<i>Ainoceras paucicostatum</i>	実物	20×15×15	Con	八島 一夫 氏	図版2-6

番号	資料・パネル名	種類	サイズ (縦×横×高)cm	時代	所蔵機関・所蔵者 (収蔵番号)	図版番号
2-2-2	<i>Vascoceras</i> sp.	実物	30×30×30	Tu	八島 一夫 氏	図版2-7
2-2-3	<i>Yokoyamaoceras ishikawai</i>	実物	15×7×15	Sa	八島 一夫 氏	図版2-8
2-2-4	<i>Anagaudryceras</i> sp.	実物	25×20×25	Con	八島 一夫 氏	図版3-1
2-2-5	<i>Eutrephoceras</i> sp.	実物	10×7×10	Tu	八島 一夫 氏	図版3-2
2-2-6	骨化石	実物	30×30×30	Tu	八島 一夫 氏	図版3-3
2-2-7	アンモナイトを入れた額	実物	30×10×35	Sa	八島 一夫 氏	図版3-4
2-2-8	化石の入ったノジュール	実物	20×20×20	Sa	八島 一夫 氏	図版3-5
2-2-9	いろいろなアンモナイトを入れた鉢	実物	15×30×30	UC	八島 一夫 氏	図版3-6
2-2-10	<i>Menuites</i> sp.	実物	15×15×15	UC	八島 一夫 氏	図版3-7
2-3	私の自慢・思い出のアンモナイト	パネル	A3	-	-	
2-3-1	<i>Gaudryceras</i> sp.	実物	23×14×16	Tu	佐々木 孝 氏	図版3-8
2-3-2	<i>Gaudryceras denseplicatum</i>	実物	21×12×14	Con	佐々木 孝 氏	図版4-1
2-3-3	<i>Anagaudryceras limatum</i> <i>Damesites damesi</i>	実物	25×16×25	Con	佐々木 孝 氏	図版4-2
2-3-4	<i>Neophylloceras</i> sp.	実物	21×10×10	Sa	佐々木 孝 氏	図版4-3
2-3-5	<i>Neomphaloceras</i> sp.	実物	25×10×23	Tu	佐々木 孝 氏	図版4-4
2-3-6	<i>Muramotoceras</i> sp.	実物	16×11×12	Tu	佐々木 孝 氏	図版4-5
2-3-7	<i>Eubostrioceras</i> sp.	実物	15×15×13	Tu	佐々木 孝 氏	図版4-6
2-3-8	<i>Kossmaticeras</i> sp.	実物	16×10×14	Tu	佐々木 孝 氏	図版4-7
2-3-9	<i>Subprionocyclus minimus</i>	実物	21×16×8	Tu	佐々木 孝 氏	図版4-8
2-3-10	<i>Pseudobarroisiceras</i> sp.	実物	14×13×7	Con	佐々木 孝 氏	図版5-1
2-3-11	<i>Desmoceras</i> sp.	実物	17×15×8	Cen	佐々木 孝 氏	図版5-2
2-3-12	<i>Pachydesmoceras kossmati</i>	実物	22×10×13	Cen	佐々木 孝 氏	図版5-3
2-3-13	<i>Pachydesmoceras</i> sp.	実物	18×12×20	Tu	佐々木 孝 氏	図版5-4
2-3-14	<i>Gaudryceras</i> sp.	実物	12×10×10	Cen	佐々木 孝 氏	図版5-5
2-3-15	<i>Yokoyamaoceras ishikawai</i>	実物	20×16×20	Sa	佐々木 孝 氏	図版5-6
2-3-16	骨化石	実物	20×15×10	Sa	佐々木 孝 氏	図版5-7
2-3-17	骨化石	実物	23×17×13	Sa	佐々木 孝 氏	図版5-8
2-4	私の自慢・思い出のアンモナイト	パネル	A4	-	-	
2-4-1	<i>Sharpeiceras</i> sp.	実物	22×23×10	Cen	小川 益弘 氏	図版6-1
2-4-2	<i>Anagaudryceras howarthi</i>	実物	16×15×10	Tu	小川 益弘 氏	図版6-2
2-4-3	<i>Calycoceras</i> sp.	実物	10×9×5	Cen	小川 益弘 氏	図版6-3
2-4-4	<i>Memites</i> sp.	実物	3×14×13	Sa	小川 益弘 氏	図版6-4
2-4-5	<i>Canadoceras</i> sp.	実物	7×19×13	Cam	小川 益弘 氏	図版6-5
2-4-6	<i>Gaudryceras yokoi</i>	実物	7×13×10	Cen	小川 益弘 氏	図版6-6
2-5	私の自慢・思い出のアンモナイト	パネル	A4	-	-	
2-5-1	<i>Canadoceras multicoatum</i>	実物	30×30×10	Cam	伊豆 斉 氏	図版6-7
2-5-2	<i>Canadoceras</i> sp.	実物	20×20×6	Cam	伊豆 斉 氏	図版6-8
2-5-3	<i>Gaudryceras crassicoatum</i>	実物	21×18×7	Cam	伊豆 斉 氏	図版7-1
2-5-4	<i>Pachydiscus soyaensis</i>	実物	16×13×7	Cam	伊豆 斉 氏	図版7-2
2-5-5	<i>Schluterella kawadai</i>	実物	13×18×10	Cam	伊豆 斉 氏	図版7-3
2-5-6	Nautilidae	実物	22×18×14	Cam	伊豆 斉 氏	図版7-4
2-5-7	<i>Desmoceras</i> sp. <i>Diplomoceras</i> sp.	実物	15×12×10	Cam	伊豆 斉 氏	図版7-5
2-5-8	<i>Canadoceras</i> sp.	実物	13×12×8	Cam	伊豆 斉 氏	図版7-6
2-5-9	<i>Anagaudryceras</i> sp.	実物	16×15×8	Tu	伊豆 斉 氏	図版7-7
2-5-10	<i>Desmoceras ezoanum</i>	実物	17×14×5	Tu	伊豆 斉 氏	図版7-8
2-5-11	<i>Anagaudryceras limatum</i>	実物	18×19×6	Tu	伊豆 斉 氏	図版8-1
2-5-12	<i>Mesopuzosia</i> sp.	実物	22×24×10	Tu	伊豆 斉 氏	図版8-2
2-5-13	<i>Tetragonites glabrus</i>	実物	15×13×9	Tu	伊豆 斉 氏	図版8-3
2-5-14	<i>Tetragonites glabrus</i>	実物	15×11×8	Tu	伊豆 斉 氏	図版8-4
2-5-15	<i>Heteroptychoceras obatai</i>	実物	10×9×10	Sa	伊豆 斉 氏	図版8-5
2-6	私の自慢・思い出のアンモナイト	パネル	A3	-	-	
2-6-1	<i>Hyperpuzosia tamon</i>	実物	38×38×16	Al	藤原 寛一 氏	図版8-6
2-6-2	<i>Oxytropidoceras</i> sp.	実物	8×9×12	Al	藤原 寛一 氏	図版8-7
2-6-3	<i>Parajaubertella kawakitana</i>	実物	32×27×10	Cen	藤原 寛一 氏	図版8-8
2-6-4	<i>Mantelliceras dixonii</i>	実物	18×13×17	Cen	藤原 寛一 氏	図版9-1

## 圓谷昂史ほか 北海道博物館第19回企画テーマ展・北海道化石会発足50周年記念展の報告

番号	資料・パネル名	種類	サイズ (縦×横×高)cm	時代	所蔵機関・所蔵者 (収蔵番号)	図版番号
2-6-5	<i>Mantelliceras lymense</i>	実物	18×18×8	Cen	藤原 寛一 氏	図版9-2
2-6-6	<i>Puzosia</i> sp.	実物	35×34×12	Cen	藤原 寛一 氏	図版9-3
2-6-7	<i>Calycoceras orientale</i>	実物	33×25×11	Cen	藤原 寛一 氏	図版9-4
2-6-8	<i>Yubariceras yubarense</i>	実物	20×20×13	Tu	藤原 寛一 氏	図版9-5
2-6-9	<i>Muramotoceras yezoense</i>	実物	10×14×8	Tu	藤原 寛一 氏	図版9-6
2-6-10	<i>Inoceramus</i> sp. <i>Eubostrioceras japonicum</i>	実物	20×16×15	Tu	藤原 寛一 氏	図版9-7
2-6-11	<i>Nipponites mirabilis</i>	実物	5×7×8	Tu	藤原 寛一 氏	図版9-8
2-6-12	<i>Nipponites occidentalis</i>	実物	8×6×10	Tu	藤原 寛一 氏	図版10-1
2-6-13	<i>Nipponites sachalinensis</i>	実物	8×7×8	Con	藤原 寛一 氏	図版10-2
2-6-14	<i>Subprionocyclus minimus</i>	実物	8×11×16	Tu	藤原 寛一 氏	図版10-3
2-6-15	<i>Hourcquia ingens</i>	実物	15×14×13	Tu	藤原 寛一 氏	図版10-4
2-6-16	<i>Gaudryceras mite</i>	実物	30×24×14	Con	藤原 寛一 氏	図版10-5
2-6-17	<i>Pachydesmoceras mihoense</i>	実物	24×17×15	Con	藤原 寛一 氏	図版10-6
2-6-18	<i>Forresteria yezoensis</i>	実物	15×17×6	Con	藤原 寛一 氏	図版10-7
2-6-19	<i>Anagaudryceras limatum</i>	実物	17×20×14	Con	藤原 寛一 氏	図版10-8
2-6-20	<i>Ainoceras kamuy</i> <i>Ainoceras paucicostatum</i>	実物	22×15×18	Cam	藤原 寛一 氏	図版11-1
2-7	私の自慢・思い出のアンモナイト	パネル	A4	-	-	
2-7-1	<i>Eupachydiscus haradai</i>	実物	11×10×12	Sa	谷口 治樹 氏	図版11-2
2-7-2	<i>Scaphites</i> sp.	実物	10×7×4	Tu	谷口 治樹 氏	図版11-3
2-7-3	<i>Gaudryceras hamanakense</i>	実物	12×13×8	Ma	谷口 治樹 氏	図版11-4
2-7-4	Echinoidea	実物	9×7×8	UC	谷口 治樹 氏	図版11-5
2-7-5	<i>Diplomoceras</i> sp.	実物	12×10×9	Sa	谷口 治樹 氏	図版11-6
2-7-6	<i>Elasmobranchii</i>	実物	16×9×10	Sa?	谷口 治樹 氏	図版11-7
2-8	私の自慢・思い出のアンモナイト	パネル	A4	-	-	
2-8-1	<i>Eupachydiscus</i> sp.	実物	19×14×13	Sa	唐沢 直道 氏	図版11-8
2-8-2	<i>Eupachydiscus</i> sp.	実物	16×14×13	Sa	唐沢 直道 氏	図版12-1
2-8-3	<i>Neopozosia</i> sp.	実物	14×12×10	Sa	唐沢 直道 氏	図版12-2
2-8-4	<i>Tetragonites glabrus</i>	実物	12×10×12	Sa	唐沢 直道 氏	図版12-3
2-8-5	<i>Polyptychoceras obstructum</i>	実物	21×15×13	Sa	唐沢 直道 氏	図版12-4
2-8-6	<i>Polyptychoceras yubarense</i>	実物	13×12×15	Sa	唐沢 直道 氏	図版12-5
2-8-7	<i>Polyptychoceras pseudogaultinum</i>	実物	18×15×10	Sa	唐沢 直道 氏	図版12-6
2-8-8	<i>Gaudryceras</i> sp.	実物	12×15×9	Sa	唐沢 直道 氏	図版12-7
2-8-9	<i>Texanites kawasakii</i>	実物	15×13×12	Sa	唐沢 直道 氏	図版12-8
2-8-10	<i>Neopozosia</i> sp. <i>Gaudryceras</i> sp.	実物	14×11×13	Sa	唐沢 直道 氏	図版13-1
2-8-11	<i>Mesopuzosia yubarensis</i>	実物	18×10×7	Sa	唐沢 直道 氏	図版13-2
2-8-12	<i>Menuites japonicus</i>	実物	17×15×13	Sa	唐沢 直道 氏	図版13-3
2-8-13	<i>Collignoniceratidae</i>	実物	11×10×11	Sa	唐沢 直道 氏	図版13-4
2-8-14	<i>Mesopuzosia pacifica</i>	実物	23×16×13	Tu	唐沢 直道 氏	図版13-5
2-8-15	<i>Romaniceras</i> sp.	実物	6×3×6	Tu	唐沢 直道 氏	図版13-6
2-8-16	<i>Gaudryceras hamanakense</i>	実物	15×10×12	Ma	唐沢 直道 氏	図版13-7
2-9	私の自慢・思い出のアンモナイト	パネル	A4	-	-	
2-9-1	<i>Nipponites mirabilis</i>	実物	17×10×17	Tu	都築 三四男 氏	図版13-8
2-9-2	<i>Ryuella ryu</i> <i>Eubostrioceras</i> sp.	実物	20×18×20	Tu	都築 三四男 氏	図版14-1
2-9-3	<i>Muramotoceras</i> sp.	実物	26×20×18	Tu	都築 三四男 氏	図版14-2
2-9-4	<i>Scaphites</i> sp. <i>Scalarites</i> sp. <i>Yezoites</i> sp.	実物	30×23×17	Tu	都築 三四男 氏	図版14-3
2-9-5	<i>Polyptychoceras</i> sp. <i>Menuites</i> sp. <i>Phyllopachyceras</i> sp. <i>Neophylloceras</i> sp.	実物	19×28×14	Sa	都築 三四男 氏	図版14-4
2-9-6	<i>Pseudoxybeloceras</i> sp.	実物	22×20×15	Cam	都築 三四男 氏	図版14-5
2-9-7	<i>Menuites japonicus</i>	実物	13×13×12	Sa	都築 三四男 氏	図版14-6
2-9-8	<i>Anagaudryceras limatum</i>	実物	17×17×10	Sa	都築 三四男 氏	図版14-7
2-9-9	<i>Romaniceras yezoense</i>	実物	17×16×6	Tu	都築 三四男 氏	図版14-8

番号	資料・パネル名	種類	サイズ (縦×横×高)cm	時代	所蔵機関・所蔵者 (収蔵番号)	図版番号
2-9-10	<i>Neomphaloceras costatum</i>	実物	20×20×10	Tu	都築 三四男 氏	図版15-1
2-9-11	<i>Neomphaloceras pseudomphalum</i>	実物	26×17×15	Tu	都築 三四男 氏	図版15-2
2-9-12	<i>Jimboiceras planulatiforme</i> <i>Gaudryceras denseplicatum</i>	実物	17×17×15	Tu	都築 三四男 氏	図版15-3
2-9-13	<i>Damesites damesi</i> <i>Yokoyamaoceras ishikawai</i>	実物	18×18×15	Sa	都築 三四男 氏	図版15-4
2-9-14	<i>Tetragonites glabrus</i>	実物	17×15×14	Sa	都築 三四男 氏	図版15-5
2-9-15	<i>Canadoceras kossmati</i>	実物	12×15×10	Cam	都築 三四男 氏	図版15-6
2-9-16	<i>Desmophyllites diphyloides</i>	実物	18×15×17	Cam	都築 三四男 氏	図版15-7
2-10	私の自慢・思い出のアンモナイト	パネル	A4	-	-	
2-10-1	<i>Sharpeiceras</i> sp.	実物	31×9×19	Cen	濱田 琢朗 氏	図版15-8
2-10-2	<i>Saghalinites teshioensis</i> <i>Metaplacenticeras</i> sp.	実物	20×15×13	Cam	濱田 琢朗 氏	図版16-1
2-11	私の自慢・思い出のアンモナイト	パネル	A4	-	-	
2-11-1	<i>Hauericeras angustum</i>	実物	19×17×5	UC	正源 直行 氏	図版16-2
2-11-2	Nautilidae	実物	20×19×12	UC	正源 直行 氏	図版16-3
2-11-3	<i>Eupachydiscus</i> sp.	実物	21×17×9	UC	正源 直行 氏	図版16-4
2-11-4	<i>Memites japonicus</i>	実物	9×14×8	UC	正源 直行 氏	図版16-5
2-11-5	<i>Subptychoceras yubarensis</i>	実物	22×15×12	UC	正源 直行 氏	図版16-6
2-11-6	<i>Damesites damesi</i>	実物	17×14×8	UC	正源 直行 氏	図版16-7
2-12	私の自慢・思い出のアンモナイト	パネル	A5	-	-	
2-12-1	<i>Tetragonites glabrus</i>	実物	13×15×10	Sa	竹田 徹 氏	図版16-8
2-12-2	<i>Damesites sugata</i>	実物	13×10×7	Sa	竹田 徹 氏	図版17-1
2-12-3	<i>Anagaudryceras limatum</i>	実物	14×8×10	Tu	竹田 徹 氏	図版17-2
2-13	私の自慢・思い出のアンモナイト	パネル	A3	-	-	
2-13-1	<i>Calycoceras</i> sp.	実物	26×37×10	Cen	岡島 孝義 氏	図版17-3
2-13-2	<i>Calycoceras</i> sp.	実物	14×17×7	Cen	岡島 孝義 氏	図版17-4
2-13-3	<i>Mantelliceras</i> sp.	実物	11×14×4	Cen	岡島 孝義 氏	図版17-5
2-13-4	<i>Cunningtoniceras takahashii</i>	実物	13×18×5	Cen	岡島 孝義 氏	図版17-6
2-13-5	<i>Mikasaites orbicularis</i>	実物	6×10×6	Cen	岡島 孝義 氏	図版17-7
2-13-6	<i>Hypoturritites komotai</i>	実物	12×12×10	Cen	岡島 孝義 氏	図版17-8
2-13-7	<i>Eogunnarites</i> sp.	実物	6×6×3	Cen	岡島 孝義 氏	図版18-1
2-13-8	<i>Austiniceras</i> sp.	実物	15×17×13	Cen	岡島 孝義 氏	図版18-2
2-13-9	<i>Turrilites costatus</i>	実物	10×20×12	Cen	岡島 孝義 氏	図版18-3
2-13-10	<i>Nipponites mirabilis</i> <i>Mesopuzosia pacifica</i>	実物	20×27×10	Tu	岡島 孝義 氏	図版18-4
2-13-11	<i>Eubostrioceras japonicum</i> <i>Scalarites</i> sp.	実物	52×30×15	Tu	岡島 孝義 氏	図版18-5
2-13-12	<i>Eupachydiscus</i> sp.	実物	21×30×16	Sa	岡島 孝義 氏	図版18-6
2-13-13	Nautilidae	実物	16×20×7	Sa	岡島 孝義 氏	図版18-7
2-13-14	<i>Scalarites</i> sp.	実物	14×20×10	Tu	岡島 孝義 氏	図版18-8
2-13-15	<i>Gaudryceras intermedium</i>	実物	18×22×15	Tu	岡島 孝義 氏	図版19-1
2-13-16	<i>Romaniceras</i> sp.	実物	14×28×15	Tu	岡島 孝義 氏	図版19-2
2-13-17	<i>Hyphantoceras</i> sp.	実物	7×20×8	Sa	岡島 孝義 氏	図版19-3
2-13-18	<i>Peroniceras</i> sp.	実物	25×30×8	Sa	岡島 孝義 氏	図版19-4
2-13-19	<i>Forresteria</i> sp.	実物	20×27×15	Tu	岡島 孝義 氏	図版19-5
2-13-20	<i>Nipponites mirabilis</i>	実物	11×10×7	Tu	岡島 孝義 氏	図版19-6
2-14	私の自慢・思い出のアンモナイト	パネル	A4	-	-	
2-14-1	<i>Tetragonites glabrus</i> <i>Yezoites</i> sp.	実物	8×7×8	Sa	加藤 慎也 氏	図版19-7
2-14-2	<i>Anagaudryceras limatum</i>	実物	12×4×18	Con	加藤 慎也 氏	図版19-8
2-14-3	<i>Anagaudryceras limatum</i>	実物	22×18×19	Con	加藤 慎也 氏	図版20-1
2-14-4	<i>Tetragonites glabrus</i>	実物	18×18×14	Con	加藤 慎也 氏	図版20-2
2-14-5	<i>Inoceramus</i> sp.	実物	9×13×19	UC	加藤 慎也 氏	図版20-3
3-0	アンモナイトと関わる人々					
3-0-1	化石と関わる人々	パネル	A1	-	-	-
3-1	博物館職員のお仕事 その1	パネル	A1	-	-	-
3-1-1	<i>Mesopuzosia indopacifica</i>	実物	14×12×7	Tu-Con	北海道博物館 (113146)	-

番号	資料・パネル名	種類	サイズ (縦×横×高)cm	時代	所蔵機関・所蔵者 (収蔵番号)	図版番号
3-1-2	<i>Mesopuzosia takahashii</i>	実物	19×15×6	Tu	北海道博物館 (113147)	-
3-1-3	<i>Scalarites scalaris</i>	実物	13×13×5	Tu	北海道博物館 (113211)	-
3-1-4	<i>Baculites yokoyamai</i>	実物	12×8×4	Tu	北海道博物館 (113223)	-
3-1-5	<i>Neophylloceras ramosum</i>	実物	15×11×5	Tu-Cam	北海道博物館 (113324)	-
3-1-6	<i>Yezoites puerculus</i>	実物	11×9×4	Tu	北海道博物館 (113397)	-
3-1-7	<i>Yokoyamaoceras ishikawai</i>	実物	11×11×7	Sa-Cam	北海道博物館 (113419)	-
3-1-8	<i>Damesites ainuanus</i>	実物	19×9×8	Tu	北海道博物館 (113446)	-
3-1-9	<i>Patagiosites compressus</i>	実物	30×15×13	Ma	北海道博物館 (113478)	-
3-1-10	<i>Hauericeras angustum</i>	実物	16×15×8	Sa-Cam	北海道博物館 (113477)	-
3-1-11	<i>Barroisiceras onilahyense</i>	実物	4×2×2	Con	北海道博物館 (113169)	-
3-1-12	<i>Polyptychoceras yubarense</i>	実物	17×7×5	Sa-Cam	北海道博物館 (113217)	-
3-1-13	<i>Ammonoceratites ezoense</i>	実物	19×14×7	Al	北海道博物館 (113432)	-
3-1-14	<i>Mantelliceras saxbii</i>	実物	12×8×4	Cen	北海道博物館 (113181)	-
3-1-15	<i>Jimboiceras planulatifforme</i>	実物	17×14×5	Tu	北海道博物館 (113145)	-
3-1-16	<i>Jimboiceras mihoense</i>	実物	18×14×6	Con	北海道博物館 (61466)	-
3-1-17	<i>Texanites kawasakii</i>	実物	15×12×5	Sa	北海道博物館 (62014)	-
3-1-18	<i>Anagaudryceras howarthi</i>	実物	13×12×8	Tu	北海道博物館 (68021)	-
3-1-19	<i>Hyperpuzosia tamon</i>	実物	44×37×18	Al	北海道博物館 (-)	-
3-1-20	<i>Menuites naumanni</i>	実物	13×11×9	Cam	北海道博物館 (62023)	-
3-1-21	<i>Menuites japonicus</i>	実物	4×4×3	Sa-Cam	北海道博物館 (62016)	-
3-1-22	<i>Sciponoceras</i> sp.	実物	19×12×7	UC	北海道博物館 (72094)	-
3-1-23	<i>Hauericeras angustum</i>	実物	12×10×4	Sa-Cam	北海道博物館 (62018)	-
3-1-24	<i>Metaplacentriceras subtilistriatum</i>	実物	3×2×9	Cam	北海道博物館 (72064)	-
3-1-25	<i>Metaplacentriceras subtilistriatum</i>	実物	5×4×2	Cam	北海道博物館 (72061)	-
3-1-26	<i>Metaplacentriceras subtilistriatum</i>	実物	5×3×3	Cam	北海道博物館 (72062)	-
3-2	化石ってどうやって探すの? その1	パネル	A1	-	-	-
3-3	化石ってどうやって探すの? その2	パネル	A1	-	-	-
3-4	学芸員のお仕事 その2	パネル	A1	-	-	-
3-4-1	ルートマップ	実物	A4	-	個人蔵	-
3-4-2	野帳	実物	16×9	-	個人蔵	-
3-4-3	<i>Mesopuzosia yubarensis</i>	実物	11×10×8	UC	個人蔵	-
3-4-4	<i>Gaudryceras</i> sp.	実物	14×13×3	UC	個人蔵	-
3-4-5	ノジュール	実物	15×10×9	UC	個人蔵	-
3-4-6	クリノメーター	実物	10×6×2	-	個人蔵	-
3-4-7	ピックハンマー	実物	32×18×3	-	個人蔵	-
3-4-8	クラックハンマー	実物	28×12×3	-	個人蔵	-
3-4-9	ルーベ	実物	5×3×2	-	個人蔵	-
3-5	化石会の活動	パネル	A1	-	-	-
3-6	化石会活動年表	パネル	A1	-	-	-
3-7	一年間の活動	パネル	A1	-	-	-
3-7-1	年賀状	実物	14.8×10.0	-	個人蔵 *3点展示	-
3-8	化石会の会員ってどんな人?	パネル	A1	-	-	-
3-9	アンモナイトとの出会いとその魅力	パネル	A1	-	-	-
3-10	化石の探し方	パネル	A1	-	-	-
3-11	持ち帰る化石と保管方法	パネル	A1	-	-	-
3-12	化石会加入のきっかけと変化	パネル	A1	-	-	-
4-1	北海道恐竜化石ネットワーク研究会	パネル	A2	-	-	-
4-1-1	北海道恐竜化石ネットワーク研究会の構成施設等の紹介コーナー	パネル	-	-	-	-
4-2	異常巻きアンモナイト3D化石図鑑	パネル	A2	-	-	-
4-2-1	<i>Nipponites occidentalis</i>	実物	5×7×7	Tu-Con	北海道博物館 (35129)	-
4-2-2	<i>Nipponites mirabilis</i>	実物	13×13×8	Tu	北海道博物館 (35126)	-
4-2-3	<i>Nipponites mirabilis</i>	実物	9×7×5	Tu	北海道博物館 (113389)	-
4-2-4	<i>Nipponites bacchus</i>	実物	5×8×6	Tu-Con	北海道博物館 (185188)	-
4-3	おわりに	パネル	A2	-	-	-

## Report on the Hokkaido Museum's 19th Special Theme Exhibition, "Living with Ammonites: 50 Years of Progress and from Now On," Commemorating the 50th Anniversary of the Hokkaido Fossil Association.

EN'YA Takafumi, KUBOMI Koh and OMAGARI Kaori

---

The Hokkaido Fossil Association was founded in 1970 by fossil enthusiasts living mainly in Hokkaido with the aim of enhancing accurate knowledge and understanding of ammonites and other fossils occurred from Hokkaido as well as promoting interaction among members, and other activities. The Hokkaido Fossil Association not only collects fossils, but also undertakes initiatives to utilize these fossils in exhibitions and educational outreach at museums and other facilities throughout Hokkaido. The Hokkaido Museum and the Hokkaido Fossil Association have collaborated and cooperated with each other since the association's inception. This paper is a report on the exhibition, which was jointly held from February to May 2022.

The unique features of this exhibition are that in addition to curators specializing in earth science

providing explanations of ammonites from the view point of the geology and paleontology, the curator specializing in folklore focus on "people associated with ammonites", focusing on individual members of the Hokkaido Fossil Association. With the aim of familiarizing visitors with fossils as well as the activities of the Hokkaido Fossil Association and the museum, we introduced a new approach involving displaying fossils that members have strong ties to, stories about these fossils, how members became interested in fossils, and behind-the-scenes stories about methods for preparation work of fossils and preservation. We conducted a questionnaire survey for visitors during the exhibition. As a result, about 90% of them were very satisfied or satisfied with the exhibition.